
恋姫無双 曹丕伝

鈴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双 曹丕伝

【Nコード】

N5172Z

【作者名】

鈴

【あらすじ】

曹操の弟として生まれた青年の、長く険しい、しかし明るい戦乱の記録。彼はどのような道を歩み、その果てに何を見つけるのだろうか。

という長つたらしい駄文です。初投稿ですので適当に見守ってやってください。恋姫の二次創作です。キャラ壊しなどあったらすみません。

序（前書き）

主人公の名は曹丕。字は子桓。真名は華景といます。
このキャラ以外にオリキャラは追加するつもりはありません。
では、どうぞ。

序

漢王朝の時代。それは長く、平和で、そして腐っていた。

俺が物心ついた頃の漢は、特に酷い有様だったことを良く覚えている。

曹家に生まれ、曹丕という名と、華景かけいという真名を授けられた俺は、幼い頃から華琳　賢姉と共に母に連れられて洛陽に行くこともあった。

その時に見た光景を今でも鮮明に覚えている。

活気のない街。飢えた民。子供ですら虚ろな目で道端に転がっていた。

当時の俺はそれを見て、これが華の洛陽かと驚愕した。そして同時に、激しい憤りを感じた。

街を見ただけで分かる、腐った宦官達の行いに。

そして俺は、その頃から心に決めた。誰も飢えない、何者にも屈しない国を造ると。

賢姉にその話をする、賢姉は笑って俺を撫でてくれた。

「そうね。必ず、強い国を造りましょう」

そう言ってくれた。

今思えば、あれが俺達姉弟の始まりだったのかもしれない。

それから俺達は、それまで以上に勉学に、武の鍛錬に励んだ。軍略を学び、政を学び、己の武を高めた。

夏侯惇　春蘭、夏侯淵　秋蘭の姉妹に出会って、皆が競いあった。

そして青年と呼べる年齢になった頃、俺は賢姉との決定的な違いに気付いた。

賢姉は非常に頭がいい。今までに学んだことを全て貪欲に吸収し、自分のものにしていく。

教えに来た老師を口で負かした時は流石にやり過ぎだと思ったが、そして武も、一兵卒では束になっても敵わないほどに強い。

かと思えば、詩を詠み、舞いを嗜む芸術家のような才能を垣間見せる。

人を惹きつける風格も、生まれたその時から持っていた。

まさしく完璧だった。賢姉に出来ないことなど、きつとないのだから。

それに比べて俺は、賢姉ほど頭が良いわけではない。

軍略に関しても政にも、賢姉には届かない。これから届くことはないだろう。

詩も詠めないし舞いも不向き。その手の才能は皆無だった。

だが、そんな俺でも唯一、賢姉に勝てるものがあつた。

それが俺の武。

賢姉と同じ大鎌【断】では、賢姉にも、夏侯姉妹にも負けたことはない。

これが俺の誇りだ。誰にも負けない武。誰にも負けられない武。だから俺は、誓いを立てた。

どんな敵だろうと、どんな状況だろうと、俺は最後まで背中を見せない。

そう誓ったんだ。

華琳 side

陳留の刺史となつてから随分と経つた気がする。

思い返せばあつという間だったけれど、忙しすぎてそんなことをする暇も無かつたということか。

ふと窓の外を見ると、小鳥が二羽、仲が良さそうに飛んでいるのが見えた。

そういえば、最近は華景の顔を見ていない。

お互いに忙しいとはいえ、少し寂しさを感じる。

未だに弟離れできていない自分に苦笑する。こんな事では華景に笑われてしまうかしら。

でもそれはあの子も同じ。あの歳になつても昔と変わらず賢姉と呼んで慕ってくれる。

あの子は強い。だから心配はしていない。

最後の書簡を書き終えてぐうつ、と体を伸ばすと、扉が開いて秋蘭が入ってきた。

「華琳様、お疲れ様です」

「ええ。でもこれで一段落つけるわね」

「そうですね。兵のほうも練度は高まっています。姉者と華景様の賜物です。

それに、ようやくお二人にお休みいただけますから」

秋蘭の言葉に、私はともかく華景が休暇を取っていないことに呆れた。

本当にあの子は、無茶をする。

「華景様にも同じ事を言ったら、『賢姉は無茶をする』と笑っていましたよ」

「華景にだけは言われたくないわね、その言葉は」

それを聞いていて、自然と顔が綻ぶ。

流石は姉弟と言ったところかしらね。同じ事をして呆れあうなんて。

「だったら早く休もうぜ？ 賢姉」

扉から聞きなれた、しかし懐かしさを覚える声がした。

そちらを見れば、蒼い外套を身に着け、少し長い黒髪をうなじで纏めた青年 華景が、いつもと変わらない笑顔を浮かべてたっていた。

しかし、笑顔の目のしたには若干の隈があり、疲れきっているのがよく分かる。

「私はいいから貴方こそ早く休みなさい、華景。顔が酷いことにな

「つてるわよ」

「いいや、俺より賢姉の方が重症だぞ。自慢の髪が少し荒れてる」

「今日はお風呂の日だから後で直すのよ。それに華景こそせっかくの外套が汚れてるわよ」

「後で洗濯するから問題ない。それより」

「お二人とも」

言い合う私達に、秋蘭の凜とした声が響いた。

言い争いに夢中になっていた私達ははっとして、秋蘭を見る。

秋蘭は真顔で、心なしに呆れているように見えた。

「お戯れになられるのは良いのですが、お二人ともこれ以上ないほどにお疲れです。」

今日はもう仕事はありませんから、早くお休み下さい」

「え？ 警邏と訓練はまだ終わってないぞ？」

「私と姉者で行っておきます」

「まだ政務が残っていたはずだけど？」

「急を要するものではありません」

「だったら鍛錬でも」

「今日は庭師が中庭の手入れをしておりますので、中庭は使えませ

ん
「

「なら兵法書でも読もうかしら」

「申し訳ありませんが、今は書庫の整理をしております」

是が非でも私達を休ませたいらしい。

あの手この手で私達が仕事に関わろうとするのを阻んでくる。

最後にはこちらが根負けして、ふう、とため息を吐いた。

「分かったわ。そこまで言われたら仕方ないわね」

「・・・・・・賢姉、その兵法書置こうぜ」

「華景こそその武器を出しなさい」

「・・・・・・」

私達はどこまでも仲のいい姉弟だった。

休暇 一（前書き）

あれ、おかしい。始まっていきなり休暇とか・・・。
ま、まあ、気にしないでおこう。うん。

休假

秋蘭に無理やり休暇を取られ、俺はどうしたものかと悩みながら城内をふらふらとさ迷い歩いていた。

何せ練兵場に行けば夏候姉妹に追い出され、執務室に行けば文官に説き伏せられ、鍛錬しようにも武器を没収され、書庫に向かえば何故か門番に追い返された。一体俺は何をすればいいのか。

そうしてふと考えると、俺には趣味といえるものがない。強いて言うならば鍛錬なのだが、これは禁止された。

我ながら、本当に面白みのない人間だな、俺。

苦笑しながらふらふらしていると、城門前ではったりと賢姉に会った。

「賢姉、どこか行くのか？」

「ちようどいいところにいたわね。華景、付き合いなさい」

俺が声を掛けると、賢姉は俺を見た途端に笑顔になつてすばやく俺の右腕を驚づかみにする。さらには絶対に逃がすものかと言わんばかりにギリギリと力を込めてくるから

「賢姉血が止まる！腕がもげるつてええええ！」

「そう、早く行くわよ」

まるで聞いちゃいないご様子の賢姉。清々しいほどの笑顔が痛い。

ああ、あの笑顔は俺にとって良くないことを考えてる顔だ・・・。

抵抗できない俺は、今日が無事に終わることを祈りながら賢姉に引き摺られて街に向かっていくのだった。

服屋。

それは服装を意識する女性にとって非常に大切な、どれほど時間をかけても足りないほどに重要な場所。・・・らしい。

「華景、これはどうかしら？」

「ちょっと背伸びしすぎじゃ　すみません何でもないです」

服屋。

それは、俺の寿命が削られ続ける恐ろしい空間である。

服屋といえば、賢姉は昔から断固として可愛い系の服を着なかった。ふりふりのやつとか、ふわふわしたやつとか。

その理由を聞いても笑顔で威圧されるだけで教えてもらったことはないが。

「賢姉ってもう少し可愛い系の服も着ればいいのに。綺麗系より似

合うかもよ?」

「貴方が着てみる? きつと素敵なことになるでしょうね」

人はそれを『見るに耐えない』と言う。

そもそも六尺(180cm)近い体格の俺がそんなことをした日には、俺はあまりの羞恥心と気色悪さに長江に身投げする自信がある。

というか普通に目に毒だ。

「ま、まあ、それは遠慮しとく」

苦笑いを浮かべて辞退すると、賢姉は残念ね、と呟いて再び服選びに戻っていった。

ここの服屋は初めて来たが、意外にも前にいた街よりも服の種類が豊富なことに感心した。

女性服専門だからなのか店員も客も女性ばかりなのがちょっと辛いが、それはいつもの事と視線を受け流す。

いままで散々こうした買い物につき合わされてきたために、こうした空気に耐性がついてしまった。

なんとも複雑な気分だが、役に立っているから良しとしておこう。

「これなんかどう? なかなか良いと思うのだけど」

「おおう、ちっと見え過ぎてないかい? 主に中が」

いや、流石にそれはないと思うぞ、我が姉よ。

それからあれやこれやと服を見て回って、気づけばそろそろ昼餉時となっていた。

服屋を後にした俺達は適当な（賢姉お勧めの）飯屋に入った。外装からして高そうな店だが、内装もこれまた高級感溢れるもので、奥は個室になっているようだ。

こんなところ来たら財布の中が素敵な事になりそうだな。

「これはこれは曹操様に曹丕様。ようこそいらっしやいました」

奥から恰幅の良い店主が揉み手をしながら笑顔で出迎えてくる。それに適当な返事を返すと、慣れた様子で奥の個室に案内された。賢姉はこの常連らしい。よく財布の中身が持つな……。

席に座って注文を済ませ、微妙な間が空く。

こうした間が空くと、何故か俺が話を振らなくてはならない使命感に駆られてくる。

別にそんな必要はないはずなのだが、無意識の俺は知らぬ間に話題を探して話していた。

「最近、近隣の賊共の動きが活発になってるらしいな。隣の州牧のそこは特に酷いことになってるようだ」

頭を捻っても仕事の話しかなかったのが残念だが、これも重要な話だ。

管路の似非占いが広まった後、それを待っていたかのように賊の動きが派手になりだした。

漢には期待していないが、各地の諸侯がそれを抑えられないほど無能だとは思わなかった。

これが何かの前触れかは分からないが、準備はしておいて損はな

いだろう。

「ええ、みたいね。それも気になるけど、もう一つ気掛かりな事があるのよ」

「んん？ 賊に関してか？」

「この間、豪族の屋敷に賊が押し入ったことがあったでしょう？ その時にその豪族が隠し持っていた書物が盗まれたらしいのよ」

豪族が隠していた書物、ねえ。

賢姉が興味を持つほどの物なら限られてくるが……………。

「……………太平要術の書。聞いた事くらいはあるでしょう」

「ん……………あるにはあるが、実在してたのか」

太平要術の書というのは、持つ者によって価値が変わる奇怪な書物だったか。

何が書かれているのか興味はあるが、そんなものは無いだろうと思っていた。

「それを奪った賊が、まだこの辺りにいるかも知れないの。賊の討伐をするならついでに手に入れたいものね」

「さらつと言う事じゃないからな。でもまあ、確かに一度読んでみたくはあるな」

下らない内容じゃないことを祈る。

久しぶりの休暇も、結局仕事からは抜け出せない姉弟であった。

休暇 一（後書き）

予想外に長くなりそうだったから無理やり切ったけど、やっぱりおかしくなったかな？

次は季衣とか桂花とか、出したいなあ・・・。

一話（前書き）

ようやく書き終わった…。
桂花が何故かこんな性格に…。

一話

休暇を満喫した俺達が仕事に戻って数日、我らが曹操軍は賢姉の指揮の下に賊討伐の準備を行っていた。

陳留では賊の数は減少してきてはいるが、前にもいった通り、近隣の太守や州牧が無能なせいで全体的な数は増え、何やら不穏な空気が大陸を覆い始めている。それを感じた賢姉は、賊の討伐を名目に軍を動かし、名を上げようとしているわけだ。

かく言う俺も、この数日はまさにてんてこ舞いであれこれとしていたわけで。中途半端に頭が回るのは考え物だな……。

そして今、俺は城壁の上に腕を組んで立っている。別に暇だからかつこつけてるわけじゃないぞ。糧食を任せた誰かさんの報告を待っているだけだ。

賢姉の趣味と実益を兼ねて定期的に行っている仕官募集で、たまに面白い文官志望がいた。

その時の試験官は俺じゃなかったが、秋蘭曰く「手際がいい」らしい。文官が不足している俺達にとってはうれしい話だが、実際に仕事ができるかどうかはまた別の話だ。それを見る上で、糧食を任せただが……。

「……遅い」

待つこと一刻。

これほど待たせてまだ来ないとは……。誰かさんはよほどいい根性をしているらしい。

さつきから俺の後ろをちよろちよろと走り回っている誰かさんは特に。

猫の耳を模した頭巾を被った、小柄で若干垂れ目な、性格がきつそうな文官風の誰かさんは、書簡を持って一刻ほど前からこの辺りをうろつろつとしている。誰かを探しているのは一目見れば分かる。誰を探しているのかも分かる。そしてそれが何処にいるのかも。

これはあれか。上官を甘く見ているのか。

「おい、猫」

こめかみを震わせながら、とりあえず声を掛けてみる。
しかしそれを誰かさんは華麗に無視してくれた。まるで俺がいなかのように見事に。

「お前だ、猫」

もう一度声を掛ける。

無視。

ああ、なるほど。これが無視される人の気持ちなのか。
確かに怒りたくもなる。

眉間を押さえて一度大きくため息を吐き、すう、と空気を吸い込む。

「……………そこのお前だ!!!!!!!!!!!!!!」

これでもかというくらいに声を張り上げ、城中に響き渡るほどの

声量で怒鳴る。

びりびりと空気が震えた。

それでようやく誰かさんは動きを止め、涙目になりつつも勢いよく俺に振り返って睨んでくる。

「な、何よ！ 私はあんたみたいな男に用はないわ！」

負けじと怒鳴り返してくるが、その姿は怯えて威嚇してくる猫そのもの。

これが期待の文官かと思うと、些か不安になってくる。

「お前が苟？ だな？」

こんな姿を見せられたら怒気も失せてしまい、呆れ半分で一応の確認をする。

「そうよ！ 何か文句ある！？」

ある。大いにある。主に態度や言葉遣いに。

そう思いながらも出かかった言葉を飲み込み、努めて冷静に次の言葉を選ぶ。

「お前に任せた糧食の帳簿がまだなんだが？ まさか、まだ出来ていないなんてことはないだろうな？」

「何で男のあんたにそんなこと教えなくちゃいけないわけ？ だいたいあんた誰よ？」

まさか変態！？ 近づかないで妊娠するでしょ！」

変態って……。ってか近づいただけで妊娠するなら今頃は国中

が子沢山になるだろう。

「俺がその責任者の曹丕だからだ」

だからな、さつさとその書簡を渡せ。こっちはお前に付き合っているほど暇じゃないんだ。

俺が名乗ると、苟？の顔色がさつきとは打って変わって別の意味で怯えた顔になり、ピタリと罵声が止んだ。

この猫、俺の顔を知らなかったのか。そうでもなければあんな事は言えないよなあ。

桂花 side

え？ ちよつと待って。この男が曹丕？

確かに何処と無く曹操様と似てる気もするけど、え？

ということは、私、曹丕様に向かってあんな事言ってたの？

血の気がさつと引いていくのが自分でも分かるくらいに青ざめる。

曹姉弟の仲の良さとその才覚は有名だ。この一帯の州で曹姉弟を悪く言う者はまずいないほどの善政を敷き、また才能ある者ならどんな身分でも取り立てる一風変わった人柄。姉弟で街を歩いているところもよく見られているらしい。

そんな方々だからこそ仕官したのに、早速やってしまった。自分

のこの口が嫌になる。

曹不様は寛容な方だと聞いているが流石にこれは絶望的だろうな、と他人事のように思った。

男が相手だと、何故か私は口が悪くなる。

別に本当に男が嫌いなのではない。ただ気づいたら罵声が飛び出している。そのせいで今までもろくに男と話したことがなく、影で色々と言われていた事も知っている。でも、どうしても治すことが出来ない。自分ではどうしようもないと諦めているし、今まで男の上官が居なかったこともあってどうとでもなった。

でも今回はそれが仇となった。

このままでは良くて追放、最悪の場合曹操様に会う事無く斬首。

いや、でもここで何とか私の事を認めさせれば、私が考えた通りになるんじゃない？

「荀？」

「は、はい」

いきなり名を呼ばれ、強張りながら返事を返す。

「とりあえず、その書簡を渡してくれるか？ 結構急ぎなんだな」

「あ、申し訳ありません！」

急いで抱えていた書簡を曹不様に手渡す。

曹不様はそれを受け取り、内容に目を通す。

その顔がどんどん険しくなっていくが、それは計算のうちだ。

読み終わった曹丕様が顔を上げる。

さあ、どつくる？

華景 side

これはまた、面白いなあ。

何が面白いって、頼んどいた糧食が半分しか用意されていない。どう考えてもこれはわざとだよなあ。なかなか面白いとは思っていたが、まさかここまで面白い子だとは思わなかった。

俺、そんなに舐められてるのか。

読み終えて顔を上げると、ちょうど賢姉と夏侯姉妹が城壁に上がってきた。

「華景様、何かあったのですか？」

春蘭が控えめに尋ねてきた。

それに笑顔で頷くと、賢姉に書簡を手渡す。

「これは？」

「なかなか愉快的な糧食の帳簿だ。ここまで面白いのは久しぶりな気がする」

俺の不可解な言葉と笑顔に首を傾げながら賢姉も書簡に目を落と

す。

読み進めるうちに俺の言葉の意味を理解したらしく、顔を上げたときには賢姉も俺と同じ笑顔だった。

「で、これの監督官はどこにいるのかしら？」

「この子だよ」

言いながら荀？の背を押して賢姉の前に立たせる。
荀？はすぐに臣下の礼をとって賢姉の前に跪いた。

「そう。貴方がこれを？」

「はい。」

十分な量は準備したつもりですが、何か不備がありましたでしょうか？

十分？　これがか？

いやいや、不備ありすぎて問題なんだが？

「どこが十分な量なのかしら・・・？」

指定した量の半分しか用意できていないじゃないの！」

賢姉がそういうと、後ろで夏侯姉妹がそういうことかと納得したように頷いた。

「このまま出陣していたら糧食不足で行き倒れるところだったわ。そうになったら、貴方はどうやって責任をとるつもり？」

「いえ、そうはならないはずです」

自信ありげにそう言い切って賢姉を見る荀？。
何を根拠にそう言っているのやら。

「ほう。それは何故かしら？」

賢姉の目が光る。

「三つ、理由があります。お聞きいただけますか？」

「いいでしょう。それが納得のいくものなら今回の事は不問にしてあげるわ」

納得いかなければ処罰する。

賢姉がしなければ、俺が。

「ご納得いただければ、それは私の不能がいたす所。
この場で我が首、刎ねていただいて結構でございます」

「……なるほど。それほどの覚悟を持って望むか。
これは何を言うのか見物だな。」

「……一言は無いぞ？」

「はっ。では、説明させて頂きますが」

荀？が一拍いれる間に、賢姉達の隣に立ち位置を変える。
聞くなり正面から聞いたほうが面白い。

「まず一つ目。」

曹操様はとても慎重なお方ですから、糧食の最終確認は必ずご自身でなさいます。

そこで問題があればこうして責任者を呼び出すはず。ですので行き倒れにはなりません」

こいつ………！

反射的に大鎌に手を添えるが、それよりも早く賢姉が激怒していた。

「なっ！　ば、馬鹿にしてるの！？　春蘭！」

「はっ！」

そこではっと思い返し、慌てて賢姉を止めにかかる。

「賢姉待った！　後二つ、理由が残ってる。首を落とすのはその後だ」

ここで首を刎ねたら約定を破ることになる。
それはまずい。

「華景様の言うとおりです、華琳様。それに先ほどのお約束は……」

俺と秋蘭の言葉に賢姉は振り上げかけた大鎌を止め、少ししてから短く息を吐いて力を抜く。

「………そうだったわね。で、次の理由は？」

「はっ。二つ目は、糧食が少なくなれば輸送部隊が身軽になり、行

軍の速度も上がります。

その結果、討伐行全体にかかる時間が大幅に短縮できるでしょう」

確かにその通りだ。

糧食が少なければ『行軍速度は』上がる。

「んん？　・・・なあ、秋蘭」

「どうした、姉者？　何かあったか？」

「行軍が早くなっても、賊の討伐自体が短くなることはないよな？」

「ああ、ならないぞ」

「そうだよな！　よかったあ。私の頭が悪くなったのかと思ったぞ」

「そうか。良かったな、姉者」

「うむ！」

春蘭の言うとおり。

いくら早く動けようが、討伐にかかる時間は変わらない。

そもそも行軍速度が上がると言っても、そこまで劇的な変化があるはずもない。

せいぜいが二割増し、良くて三割が関の山だ。

それをどう縮めるつもりだ？

「まあいい。それで、最後の理由は？」

「はい。・・・三つ目の理由は、私が提案する策を用いれば、

賊の討伐にかかる時間はさらに短縮できるでしょう。

よって、この量の糧食で十分だと判断いたしました」

「……………はあ。ほうほう。」

「曹操様！どうかこの荀？めを、曹操様を勝利に導く軍師として麾下にお加え下さいませ！」

なるほどなるほど。

こいつ、最初からこういうつもりだったわけか。
本当にいい根性してやがる。

「……………華景。この子、確かに面白いわね」

「だろ？ 言った俺もびっくりしてる」

熱い決意を胸に願い出る荀？と、それに驚く夏侯姉妹をよそに俺達は互いに笑いあう。

お互いに考えていることは同じようだ。

「荀？といったかしら。貴方、真名は？」

「はつ。桂花にございます」

「そう。桂花、貴方、私を試したわね」

「はい」

なんともすんなりと認めた。

これには流石に怒りを通り越して感嘆してしまふ。

だが、うちの將軍には逆効果だぞ。

「何い？ 貴様、いけしゃあしゃあと……！！」

華琳様！このような無礼者、すぐに首を落とすべきです！」

案の定吠え出す春蘭だが、桂花はそれに臆する事無く言い返す。

「あんたは黙ってなさい！

私の運命を決めていいのは曹操様だけよ！」

おうおう、言うねえ。切れてる春蘭に向かって、大した度胸だ。それとも、今は賢姉しか見えていないのか。それはそれで問題だな。

「き、貴様あ……！」

さらに怒り出して大剣を抜こうとする春蘭の肩を抑える。今此処で暴走されたら、賢姉がやろうとしていることの邪魔になる。

それは面白くない。

「春蘭、落ち着け。全ては賢姉次第だ」

「ぐっ、うう……華景様が、そう仰るなら」

顔を歪めながらも、春蘭は素直に大剣から手を放した。それを確認して、賢姉は桂花に話しかける。

「桂花。軍師としての経験はある？」

「はつ。ここに来る以前は、南皮で軍師をしておりました」

「・・・・・・・・・・そう」

南皮っていうと・・・ああ、麗羽のどこか。

あれだったら出て行きたくもなるな、確かに。

「どうせあれのことだから、軍師の言葉など聞きはしなかったでしょう。」

それに嫌気が差して、この辺りまで流れてきたのかしら？」

「・・・まさか。聞かぬ相手に説くことは、軍師の腕の見せ所。

まして仕える主が天を取る器であるならば、その為に己が力を振るうこと、何を惜しみ、躊躇う事がありましたよ」

「・・・・・・・・ならばその力、私のために振るうことは惜しまない？」

「ひと目見た瞬間、私の全てを捧げるお方と確信いたしました。もしご不用とあらば、この苟？、生きてこの場を去る気はありません。」

遠慮なく、この場でお切り捨ててくださいませ！」

それを聞いて、俺は喉の奥でクツクツと小さく笑った。

賢姉が好きそうな性格してる。

「いい人材を見つけてきたな、秋蘭」

「我ながらそう思います」

賢姉は無言のまま、手に持つ大鎌の切っ先を桂花に向けた。
その顔はうつすらと笑っている。楽しんでるなあ。

「……桂花。私がこの世でもっとも腹立たしく思うこと、それは人に試されることよ。

分かっているかしら？」

「はい。そこをあえて試させて頂きました」

賢姉の手に力が込められる。

「そう。……なら、こうすることも貴方の掌の上ということね」

一瞬力を抜いたかと思うと、次の瞬間には大鎌を振り上げ、桂花に向かって躊躇せず振り下ろした。

大鎌が風を切り、はらりと桂花の前髪が少しだけ舞い落ちる。

「……やっぱ、そうするよな」

大鎌の切っ先は寸分の狂いもなく、桂花の首の前で静止していた。
後少しでも動かしたら桂花はお陀仏だっただろう。

「当然よ。……でも桂花、もし私が本当に振り下ろしていたら、どうしていた？」

「その時はそれが天命と受け入れておりました。
天を取る器に看取られることは誇りこそすれ、恨むことなどありません」

口達者なのは、考え物だな。
軍師つてのは特に。

「嘘は嫌いよ。本当のことをおっしゃいなさい」

「曹操様のご気性からして、試されたなら、必ず試し返すに違いな
いと思いましたので。」

避ける気など毛頭ありませんでした。・・・それに私は軍師であ
って武官ではありません。

あの状態から曹操様の一撃を防ぐ術は、そもそもありませんでし
た」

「そう・・・」

小さく呟いた賢姉が、桂花に突き付けていた大鎌をゆっくり下ろ
す。

「・・・ふふつ、あははははは！」

「か、華琳様・・・？」

突然笑い出した賢姉に夏侯姉妹が戸惑うが、それにはお構いなし
に賢姉は言葉を紡いだ。

「最高よ、桂花。私を二度も試す度胸とその智謀、気に入ったわ。
あなたの才、私が天下を取るために存分に使わせてもらう事にす
る。いいわね？」

「はっ！」

「ならまずは、この討伐行を成功させてみせなさい。

糧食はこれで十分と言ったのだから、もし不足したならその失態、身をもって償ってもらわよ?」

「御意!」

さあて、これからは楽になるといいがな。

一話（後書き）

長い！ 我ながら長い！

そして桂花がどこことなく小心者に？

すいません、これが私の限界でした・・・。

二話（前書き）

前の話が長すぎたから今回は短めにしますた。

二話

かくして、新しい軍師を迎えた我らが曹操軍は、意気揚々と出陣した。

いや、意気揚々つてのは言葉が悪いか。肅々と厳格に、だな。

晴天の下、俺は先頭だつて馬を進ませる。

一応これでも賢姉の弟で武官筆頭だからな。俺が先頭にいることで士気が高まることもある。

ちなみに賢姉は軍の中程に桂花と、その護衛と言う形でそばに秋蘭もいる。

春蘭は俺の隣で若干不機嫌そうに不貞腐れている。

大方、賢姉の傍にるのが桂花だから不服なのだろう。

「そう怒るなよ、春蘭。今回は仕方ないだろう？」

「むう。ですが、何故新参者のあやつが華琳様のお傍に・・・」

「昨日あれだけ相手をしてもらっただろうが。今はあれで満足しときなさい」

「それとこれとは話は別です！」

先刻からずっとこんな調子で拗ねるもんだから、とてもじゃないが手に負えない。

賢姉か秋蘭がいればどうにかなるのかも知れんが、それは無いものねだりというやつか。

「華琳様の決定ですからあやつが軍師となるのは仕方ないとは思いますが、あの泥棒猫が華琳様のお傍にすることに納得できません！」

「いや、納得する云々の話ではなくてだな……」

「あやつが来てからというもの、華琳様のご寵愛を受ける機会がめっきり減ったですよ!？」

何かにつけては出し抜かれてしまって、あやつばかりが

」

あー、誰か来てくんねえかな。

なんか勝手に白熱してすごいこといつてるんだが。

一人で盛り上がっている春蘭から目を逸らして空を見上げる。

天気いいなあ。雲一つない晴天ってのはこういうのを言うんだろ
うなあ。

あ、蝶々。

「姉者、華景様。華琳様がお呼びです どうかありませんか？」

「……あ？ 秋蘭か。いや、天気いいなあってな。すぐ行く」

空を仰ぎ見る俺を心配そうに見る秋蘭に適当な返事を返し、一人でしゃべり続ける春蘭を連れて、俺は賢姉の下に向かって後退していった。

「曹不様と夏侯惇に、偵察部隊を率いて先行していただきたいのです」

本陣に着くと、軍議の場でいきなり桂花にそんな事を言われた。もう少し順を追って説明してもらいたいものだが、なんとなく言いたいことは分かる。

「一応聞くが、何の話だ？」

「先ほど先行していた偵察から報告がありまして、前方数里ほどの地点に旗のない集団を発見いたしました。」

報告を聞く限りではおそらく野盗か山賊の類と思われます」

「で、とりあえず様子見の意味でもう一度偵察隊を向かわせようと思っただけだ」

桂花の言葉を途中から賢姉が続ける。

軍議の前に報告が来て、二人で話し合ったのか。

それから軍議を開いて確認しているらしい。

「それで俺達か」

ふむ。俺としては特に文句もない。

強いて言うなら、よくもいきなり俺を顎で使いやがる、くらいだ。

だがそこで、正氣に戻っていた春蘭が食って掛かった。

「ちょっと待て！ 何故そこで華景様が行かねばなんのだ！
偵察だけならば私だけで十分だろう！」

まあ、確かに俺じゃなくてもいいんだがね。春蘭の言うとおり。
ただ春蘭だけじゃあ不安なのも確かだわな。

「あんた馬鹿！？ ちゃんと状況判断が出来て、的確な指揮が出来る人が行かないと偵察の意味がないでしょう！」

追記するなら、それが出来る武官は俺の他には秋蘭のみ。
こんなことに賢姉は駆り出せないし。

春蘭？ いや、春蘭は……ねえ？

「ぐっ……！ それでは私が馬鹿のようではないか！」

言わない……。俺は言わないぞ……。お前は馬鹿
だとは……！

堪えているのは皆同じらしく、天幕の中を一瞬、静寂が支配する
空間と化した。

「……………」

「……………」

「……………」

「な、何故そこで黙るのですか！」

……春蘭。人には耐えねばならん時があるのだよ。

「……まあ、とりあえず俺と春蘭が行けばいいんだな」

「はい」

「お願いするわね、華景」

「了解」

秋蘭に宥められる春蘭を横目に、軍議は終了した。

すまん、春蘭。また今度、賢姉に相手してもらおうように交渉するから。

二話（後書き）

春蘭の扱いが若干不憫な気がします。原作もこんなもんだっ
がします。

やりすぎだったらすいません。

続・二話（前書き）

三点リーダーを使ってみました
変だったら教えて下さい

続・二話

そんなこんなで先遣隊を率いて道を急ぐ俺と春蘭。

戦は楽じゃないのは分かっているが、まさかこうも早々と仕事が終わってくるとは思わなかった。我らが軍師殿の神経の図太さにはほんとと感心せざるを得ないな。まるで俺に恨みでもあるんじゃないかと勘繰りたくなるほどに。愚痴を言っても仕方ないのも分かっているが、どうにも桂花が俺を見るときの目に敵意を感じてしまう。いや、敵意というか、殺意？ よく分からないが目を合わせるたびに睨まれているような気がするんだよなあ。すぐに逸らされるし。

「……………なあ、春蘭」

「はい？」

「俺、先が思いやられるわ」

「は、はあ…………？」

俺の突然の言葉に疑問符を飛ばしながら首を傾げる春蘭。

何のことが伝わっていないが、説明するのも億劫なのでそのまま進んでいく。

これ以上後ろ向きな気分になる前にさっさと仕事を終わらせて帰ろう。

報告があつた辺りに到着すると、そこからさらに先のほうに確かにそれらしき集団が居るのが見える。数にして大体数十人くらいのいかにも野盗といった連中が何かを囲んでいるようだ。そして、その中心辺りで人が物理的に昇天している。新しい宗教の儀式だろうか？また物騒な儀式をする連中もいたものだ。

そんなどうでもいいことを考えながらさらに距離を詰めていくと、どうやら連中は小さな女の子を囲んでいるようだ。先ほどから上がっていた人間花火はその子が一人で行っていたらしい。というかあの子、なんつう馬鹿でかい鉄球振り回してんだ？

「子どもが戦ってるな」

自分でも驚くほど冷静に、目の前の事を呟く。

「な！ 何ですと！？ 早く助けましょう！」

いや、行くつもりなんだが。

と春蘭に言う間もなく、彼女は颯爽と？ いや、猛然と賊共に向かって突撃していった。

春蘭。お前はそんなだから馬鹿にされたり猪呼ばわりされるんだぞ？

「あの…曹丕様、我々はどうすれば？」

見事に置いてけぼりを食らった後ろの部隊の一人が、戸惑いながら俺に聞いてくる。

どうって、あれを追いかけるに決まってるだろうに。

「誰か曹操様に報告に行け。それから何人か賊を泳がせるから、後を追う者を数人置いていく。それ以外はあれを追いかけるぞ」

あれ、と親指で春蘭を指し、返事を返す兵達と共に走り出す。

賊が束になって宙を舞う。俺が行かなくてもよくないか？

「まだまだあ！！！！！」

「でえええい！！」

掛け声をかけながらどんどん敵を吹き飛ばしていく春蘭と少女。どうみてもやり過ぎだろう。吹っ飛んで粉々になってる奴とかいるし。血の雨って本当に降るんだな。

ただでさえ二人の怪力に薙ぎ倒されていた賊たちは、俺達が到着したことによりもともと無いに等しかった土気がさらに落ち、一人、二人と逃走を始めだした。これで後は追跡させて本拠地を探り出せばいいだけだ。…………俺の仕事、無かったなあ。別にいいけどさあ、こう、武官として、ねえ？

「待てい！ 逃がしはせんぞ！！」

「お前が待てい」

さらなる暴走を始める前に春蘭の襟を引っつかんで無理やり押し

止める。

「何故止めるのですか!？」

「あいつらには本拠地まで案内してもらったから、我慢しなさい」

「? ……おお、なるほど。おおい! 誰かある!」

「もうやってるからな?」

おお、春蘭よ。お前の愛すべき馬鹿さ加減が切なくなってくるぞ。

などと二人でじゃれ合っていると、少女が遠慮がちに声を掛けてきた。

「あの、助けて頂いてありがとうございました!」

髪を二つに分けて括っている活発そうな少女は、そういつて勢いよく頭を下げた。

礼儀正しい子だなあ。将来子どもが出来たときはこう育て欲しいものだ。でも鉄球を振り回すほどやんちゃなのは勘弁。

いや、そもそも相手がいない云々。

「おお! 怪我はないか? 勇敢な少女よ」

「あ、はい! 大丈夫です!」

仲が良さそうに笑いあう二人は、性格の似通った姉妹のように見えなくも無い。

というか、春蘭がちゃんと姉に見える！不思議！

「それはさておき、何でまた一人で戦ってたんだ？　これは勇敢と言っよりも蛮勇だぞ」

確かに一人で賊と戦うのは勇氣ある行動だろう。だが、それで殺されては元も子もない。

言い方は悪くなるが、勝てなければどれほど強かろうと無意味なのだから。

「それは……」

言い咎める俺に、気まずそうに話し出そうとしたところで、ちょうど後方から賢姉率いる本隊が到着した。まるで俺達の事を見ていたかのように。

それに春蘭が手を振っていると、少女の表情がさっきまでの嬉しそうな顔から一変して驚きと怒りに変わったように見えた。いや、怒りかどうかは分からないが、そんな風に見えた。

「報告は聞いたわ。ご苦労だったわね、春蘭、華景」

「俺はなーんもしてないけどねえ。全て春蘭とこの子がやってくれたよ」

いや本当に。俺ってば要らない子だったよ。

「もしかしてお姉さん達、国の軍隊………！？」

「ん？　まあそうだが……っ！！」

春蘭が答えた途端、少女が春蘭に向かって鉄球を振っていた。寸でのところで反応できた春蘭は迫り来る鉄球を弾く。そしてそれはそのまま俺の方へ

華琳 side

とつさに春蘭が弾いた鉄球が、ぼうつと立っていた華景に向かっていく。

突然の事に呆気にとられていた私はそこではつと我に帰り、未だにぼさつとしている愚弟に叫んだ。

「華景！ 前を見なさい！」

鉄球が目前に迫ってきて、ようやく華景は動き出した。

ギリギリまで来た鉄球を大きな音を立てながら思い切り蹴り上げ、それに少女が気をとられている間に素早く肉薄する。

それに反応し切れなかった少女の背後に回り込むと、少女の腕を捻り上げて首に大鎌の刃をあてがった。

少女は武器を落とし、地面に倒される。

「あう！」

「……で、この子殺していいのか？」

普段とは違う、酷く平坦で感情がこめられていない声で、少女を睨むでもなく見下ろす。

対する少女は身動きできず、ただ華景と私達を睨んでいた。

「待ちなさい、華景。まだこの子には聞きたい事があるのよ」

放っておくと本気で殺してしまう。

華景に待ったをかけ、押さえている少女を解放させる。

華景は少女を放しはするが、鋭い視線だけは決して離さず少女の背後に立ったままだ。

手にしている大鎌も何かあればすぐに首を刈り取れるように構えている。

華景が、少女を敵と認識してしまったようだ。

これは少し急いだほうがいいわね……。

「貴方、名前は？」

「……許緒」

「では許緒。何故いきなり攻撃してきたの？」

私が問いかけると、許緒は先ほどよりもさらに厳しい目で私を睨む。

「役人なんか信用できるもんか！　ボク達を守ってくれないくせに税金ばかり持っていつて！！」

それは盗賊から守ってもらえなかった民の総意。

統治者として民にもつとも言わせたくない言葉。

許緒はそれを力の限り私に叩きつけてくる。

「ボク達がどれだけがんばって育てても全部役人が持つていく！
何もしてくれないくせに！

賊が来ても、病気が流行っても、何も！だからボクがみんなを守るんだ！

ボクがみんなを盗賊からも……役人からも守るんだ！！」

この子はきつと、こんな事を言った後に処断されてしまうことも分かっている。

それでもなお、言わずにはいられない。それほどまでに、民は追
い詰められている。

少女の絶叫を聞く皆の顔が歪んでいた。

華景の鎌がピクリと動く。

攻撃の意思はなく、華景は構えていた大鎌をゆっくりと下ろして
私を見た。

「……………そう。許緒、ごめんなさい」

私は激昂する許緒に、身分など気にもせず深々と頭を下げた。

ここは私が治める領地ではない。だとしても、同じ為政者として
謝りたかった。

この国の民である許緒に、この国の為政者として。

「曹操、様……………」

「華琳様……………」

「何と……」

「え？ あの……！」

頭を上げ、予想外の事に一人慌てる許緒に改めて向き直る。

「そういえばまだ名乗っていなかったわね。私は曹操。山向こうの陳留の街で、刺史をしているものよ」

「山向こう？ ……あつそれじゃっ！？ ご、ごめんなさい！」

私が名乗ると、今度は許緒が深々と頭を下げてる。

「山向こうの街の噂はよく聞いています！」

向こうの刺史様はすぐ立派な人で、悪いことはしないし、税金も安くなっだし、盗賊もすぐ少なくなったって！

そんな人に、ボク……！」

「構わないわ。今の国が腐敗しているのは、わたし達が一番よく知っているもの。」

官と聞いて許緒が憤るのも、当たり前の話だわ」

「で、でも……」

まだ気まずそうにする許緒に首を振る。

この子が謝る必要はどこにもないのだから。

「だから許緒。あなたの勇氣と力、この曹操に貸してくれないかしらっ？」

「え……？　ボクの力を……？」

「私はいずれこの大陸の王となる。けれど、今の私の力はあまりに少なすぎるわ。」

「だから……村の皆を守るために振るったあなたの力と勇気を、私の私に貸して欲しい」

「華琳さまが、王に……？」

「ええ」

「支配者ではない、為政者として。帝ではなく、王として。」

「戦をするためではなく、戦を終わらせるために。」

「あ、あの、曹操様が王様になったら……ボク達の村も守ってくださいか？」

「盗賊もやっつけてくれますか？」

「約束するわ。陳留だけでなく、あなた達の村だけでも……。この大陸の皆が平和に暮らせるようになるために、私はこの大陸の王になるの」

「この大陸の……みんなが……」

私の言葉をかみ締めるようにゆっくりと、許緒は繰り返した。

続・二話（後書き）

もう今日は思いついたネタをどうやって本編にねじ込もうかとばかり考えていました。

ああ……早くあのキャラのところまで進めたい……！

三話（前書き）

短く分けすぎかな？
まあ、いいか。

三話

賢姉と会話し、その思いに触れた許緒

季衣は感銘を受けて

我らが曹操軍の一員となることを決意。

早速、今回の賊討伐に従軍する事となった。そのお陰で軍はにぎやかになったもんだ。

主に春蘭と季衣が仲良く大声で笑いあったりしてるからだが。

俺としては誤解とはいえ武器を向けてきた輩を素直に信用してよいものかと思いはするが、あの状況なら仕方なかったのだと割り切ることにした。

いくら季衣が凄まじい武をもっているとしてもまだまだ子ども。これからしっかりと教育していけば問題なかるうと結論付けた。それよりも問題なのは……。

「兄ちゃん！ 曹操様が呼んでるよ」

「……季衣。兄ちゃんはやめてくれ。俺は弟であって兄じゃない」

季衣が無邪気に俺の事を兄ちゃんと呼んでくることだ。俺にわざわざ謝りに来たときから。

今まで年下の知り合いやら部下をあまり持ったことがないから、兄ちゃんといわれると激しい違和感しかない。

注意もこれで十回目。そして注意するたびに決まって

「にゃ？ 兄ちゃんは兄ちゃんでしょう？」

と返されるからどうしようもない。

だが！ 俺は！ 諦めない！ いつの日か、必ず兄ちゃんと呼ぶのを止めさせてみせる！

無駄に固く心に誓った俺は、季衣と共に賢姉が待つ天幕に向かった。

「全員揃ったわね。では、始めましょう」

賢姉の言葉で、恐らく今回の賊討伐では最後になる軍議が始まる。

「ではまず、こちらの地図をご覧ください」

桂花が何処から取り出した地図を机に広げる。

この地図は……賊の根城と化している砦とその周辺の見取り図か。

ちなみに、俺達は今その砦の見える位置に布陣している。

明日には戦闘が始まるだろう。そのために作戦を立てているのである。

「見る限り、かなり堅牢な砦だな」

秋蘭が地図を覗き込みながら言う。

背後は絶壁。門の造りも頑丈そうだ。

これを普通に攻略しようとするならばそれなりの攻城兵器が必要になる。

それをしないための策だが。

「季衣。この辺りに他に盗賊団はいるかしら？」

「いえ、この辺りには他にいないはずですから、華琳様が探している盗賊団はこいつらだと思います」

「そう。敵の数は把握できているの？」

「はっ。偵察にいかせた者の報告では、三千強との事です」

「ふうむ。こっちが千と少しだから、ざっと三倍ってところか」

これだけ聞くと、絶望的な状況だな。

堅牢な砦に引きこもる三倍の敵。

唯一の救いは、敵が賊でろくに訓練を積んでいない烏合の衆ということか。

「いくら数を揃えようと、所詮は雑兵の集まり。

将どころか命令系統もろくに整っていない者共に遅れはとりません」

「ええ、そうね。けれど何か策があるのでしょうか？ 桂花。糧食の件、忘れていないわよ」

「はっ。兵の損害を抑え、かつ討伐時間を短縮するための策、既に我が胸の内に」

その無い胸の内によく収まったな、とか言わない。

……そんなに睨むなよ、照れるじゃないか。

「説明なさい」

「……はっ」

賢姉に促されて、桂花は俺から目を逸らして作戦を語り始めた。

「まず、曹操様と曹丕様は少数の部隊を率いて砦の前に展開していただきます。

その間に夏侯惇・夏侯淵の両名は後方の崖に残りの兵を伏せて待機。

その後、本隊が盛大に銅鑼を鳴らして攻撃することを匂わせれば賊共は必ず砦から出てきます。

お二人は兵を後退させ、賊共が全て砦から出たところで……」

「私と姉者が後方から打って出る、と」

「ええ」

「なるほど。砦から敵さんを釣り出すわけか。

そして、その釣り針は賢姉。網は春蘭と秋蘭」

そこまで話したところで、黙っていた春蘭が声を上げた。

「……ちょっと待て。それはなんだ、華琳様を罠にするという事か!？」

さっきからそう言ってるじゃないか。

「そうなるな」

「何か問題が？」

「大ありだ！ 華琳様にそんな危険なことをさせられるわけがない！」

うんうん。

万が一にも賢姉が死んでしまうようなことがあったら元も子もないからな。

でもな、春蘭。

「お前の言いたいことはよく分かる。
つまり、俺はそんなに信用されてないってことだよな？」

俺と賢姉が一緒にいるのは、俺が賢姉の護衛に着くってことだ。
それに季衣の名が出なかったことから季衣も護衛に着くはず。
俺と季衣がいるのにそんな事を言うなんて、俺は悲しいぞ。

「え！？ いえ、そのような事は決して！ ただいくら華景様と季衣がいても危険な事に変わりはない」

「おい季衣。俺達は春蘭に信用されてないらしいぞ」

「え？ そうなんですか？」

季衣も巻き込んで春蘭をからかいにかかる。
が、それは流石に秋蘭が間に入ってとめられた。

「華景様。あまり姉者をいじめないで下さい。
姉者も、華景様達なら大丈夫だ。必ず華琳様を守ってください」

「う、うむ……」

「悪い悪い」

「冗談はこれくらいにして。」

「だ、だが、そんなことをしなくても相手が烏合の衆ならば正面から叩き潰せばよからう」

……しておきたかったなあ。

春蘭。君は実に……いや、よそう。これでこそ春蘭だ。

「こちらが寡兵で、しかも後退すれば敵は油断する。

そこに伏兵が現れば、敵は大きく混乱するわ。

そうなれば、烏合の衆をより迅速に、尚且つ最小の被害で倒すことが出来るのよ。

今この現状では最良の策だと思うのだけれど？」

「な、ならば敵がこちらの誘いに乗らなければ？」

「…………ふっ」

うわあ、鼻で笑ったよこの子。完璧に馬鹿にしてるよこの子。素敵な性格してんな。憧れるぜ。

「な！　なんだその馬鹿にしたような目は……！」

「曹操様。相手は志を持たず、武を役立てることもせず、賊に身をやつすような単純な者共です。」

間違いなく、夏侯惇殿よりも容易く挑発に乗ってくれるものと
……」

「な……な、な、なんだとおおおお！！！！！！」

あーあー、春蘭が完全に切れた。

こんな簡単な挑発に乗るから……。

「はいはいどうどう。貴方の負けよ、春蘭」

「華琳様あ……………」

「でも春蘭の懸念ももつともよ。次善の策はあるのでしょうか？」

「勿論です。そのためにこの地図をお見せいたしました。

もし敵が挑発に乗ってこなかった場合はここから兵を侵入させ、
砦を内側から破ります」

桂花が背後の崖に面した一角を指し、次善の策を説明していく。

まあ、俺らが無い頭捻って考えるよりも良作なのは確かか。
後は想定外の事になった場合の対処は……現場の判断だよな。

「そうね。では、この策でいきましょう」

「華琳様！」

「春蘭。これだけ勝てる要素が揃っているのに囫一つ出来なくて、
これから覇道を歩むことなんて出来はしないわ」

我らが賢姉はこういつては自分を追い込むのが好きなんじゃないかな
らうかと思う。

自分から進んで困難な道を進んでいくのが。

こういうの、なんて言っただか。……………被虐思考？

三話（後書き）

もう少し……もう少し……。
もう少しであの子に会える！
ふ、ふふふ。

でも後五話くらい先かも。

四話（前書き）

案外と誤字が多くて凹むこの頃。
まだあったりしましたら教えて頂けるとありがたいです。

四話

桂花の献策通り、俺達本隊は少数の精鋭部隊を率いて砦の前に展開した。

これから戦となると否応なく心が昂ぶっていくが、そんな心情とは裏腹に顔からは表情が消えていく。

高揚していくにつれて、冷めていくような感覚だ。

完全な無表情の俺の隣に、賢姉が馬を並べた。

賢姉の表情は少し寂しそうで、だが俺は何も言わない。

「華景、無理をしてはダメよ」

賢姉が心配そうにそう言うてくる。

だがそれは賢姉の方だ。俺よりもずっと無理をしている。

「問題ない」

そう思っても賢姉に指摘する事無く、俺は低い声で短い返答を返すだけだった。

賢姉はそう、と呟くと、それ以上何も言わずに後方に下がっていった。

もうすぐ、殺し合いが始まる。

華琳 side

華景の様子は、良くも悪くも『いつも通り』。

『いつも』の笑顔ではなくなっているが、『いつも』の無表情だ。あれならあの子は死ぬことは無い。……でも、安心は出来ない。あれは枷を外した虎と同じ。いつ暴走してもおかしくない。

あの子には武において天賦の才がある。幼い頃から共に歩んできた私はそれを知っている。

だが同時に、あの子には無慈悲な人殺しの意識が眠っている。戦狂いの様に、殺す事に愉悦を見出している。あの子が戦う姿はそうとは思えない。

「曹操様？　どうかなさいましたか？」

心配そうな桂花の声にはっと顔を上げる。

いつの間にか桂花と、季衣が私の顔を覗き込んでいた。よほど深刻な顔をしていたらしい。私らしくも無い。

私は二人に、努めて普段と同じように笑った。

「なんでもないわ。それよりも、そろそろ時間よ」

あの子の事は後回しだ。今は目の前の賊に集中する。

こんな事では、全体の士気に影響してしまうかもしれない。気を付けなければ。

開戦の銅鑼になる。

そして皆から飛び出してくる賊共。

「……ねえ、桂花。これも想定範囲内かしら？」

「……いえ、流石にこれは予想外です」

でしょうね……。

どうやら奴らはこちらが鳴らした銅鑼の音を、出陣の合図と勘違いしたらしい。

いくら賊といえど、これは酷すぎる。本当に数が多いだけなのがよく分かった。

「でもこれは好機ね。全軍に告ぐ！ 我らは敵の攻撃を受け流した後、即時反転、後退する！」

声を張り上げて指示を出し、自身の武器である大鎌【絶】を構える。

さあ、来るがいい！！

秋蘭 side

崖の上に兵を伏せて待機すること半刻。
銅鑼の音が聞こえ、作戦が開始されたはずが、何故か賊共が皆か

ら続々と出撃していく。

予定ではまだ挑発を行っている最中のはずだが……。

「報告します！ 曹操様率いる本隊が後退を始めました！」

「そうか。分かった」

走り去る伝令から目を離すと、慌てた様子の姉者が入れ替わりに駆け寄ってくるのが見えた。

「秋蘭！ 本隊が後退を始めるのがやけに早くないか？」

……まさか、華琳様の身に何か！？」

声を荒げて今にも飛び出しそうな姉者は可愛いが、今行かれては策が成らない。

「落ち着け姉者。大方、予想よりも策が順調に進んでいるのだろう。それに華琳様には、華景様と季衣が護衛に就いているのは覚えていたろう？」

ゆっくり諭すようにして宥める。

「う、うむ……」

華景様の名を聞いて大人しくなった姉者は、皆から出てくる賊に目を向けた。

奴らがあまりにも無防備に突撃していくことは、こちらとしてはありがたい。

「しかし、これが盗賊団か」

「隊列も何もあつたものではないな」

このような者共を相手にしても訓練にすらなりはしない。
そういう意味では、今回の討伐は外れだったか。

「なあ、秋蘭。……突撃してはダメか？」

「ダメだ。まだ敵の殿が出てきていない」

「しかしだな、これほど無防備にされると殴りつけたくなる衝動が……」

「気持ちは良く分かるが、まだだ。だが、準備はしておくでしょう」

「おう！ 全軍、突撃準備！ いつでも出られるようにしておけ！」

……姉者に待ったをかけてさらに待つと、ようやく殿が見えた。

「……もう、いいな！？」

「ああ、思いっきり行ってくれ、姉者」

姉者にそういうが早いか、姉者はいつの間にか大剣を引き抜いて高々と掲げていた。

「全軍、突撃iiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！！！！！！！！！」

『おおおおおおおおおおおおお！！！！！！！』

勇ましい号令とそれに応える兵士達の地響きにも似た声を合図に、私達は敵に向かって突撃していった。

華景 side

攻撃をいなしながら本隊が後退していると、敵の後方から怒声が聞こえてきた。

どうやら伏せていた二人が動いたようだ。そのお陰で、前曲に集中していた攻撃が和らぎ、賊が混乱しているのが見えた。

機は熟した。

「全軍、反転！ 反撃を開始せよ！」

賢姉の号令を受け、後退していた本隊が反転する。

先ほどから後退していた我らが反撃を始めたことで、賊の混乱はさらに広がる。

これで、心置きなく殲滅できる。

「賢姉、俺は前に出る」

ここまでくれば、俺が護衛にいる意味はあまりない。
季衣だけでも十分にこなせるだろう。

「……ええ、あまり前に出すぎてはダメよ」

賢姉からの承諾を得て、俺は大鎌を引っさげて乱戦の中に突撃した。

乱戦、とは言ったが、実質は我らの精兵が賊徒を刈り取っているだけ。

賊の抵抗などあつてないような脆弱なものでしかない。

「死ねやあああ!!」

俺に向かって振られる剣を体を横に動かして避け、すれ違いざまに首を刈る。

血飛沫が上がり、倒れる体を無視して、仲間の死を見て固まっている数人の首も同様に刈り取っていく。

分かつてはいたが、弱すぎる。

個々の武が低すぎる。

お前達の命はこんなものか？

飛来する矢を弾き、敵陣の奥へ疾駆する。

その最中でも、俺の近くにいた賊はすべて刈り取り、誰一人として逃しはしない。

奥へ。もっと奥へ。

お前達の喉元はあまりに無防備だぞ。

容易く食い破られるのか？

死力を尽くしても、こんなものなのか？

大鎌を薙ぎ、突き、刃の反対側についた鉤爪状の突起で引き裂く。円を描くように大鎌を振り回し、蹂躪していく。

返り血で真紅に染まった、元は蒼い外套。血が滴り落ちる大鎌【断】。

「まだ、終わってはいないだろう」

敵陣の奥に辿り着くが、賊たちは既に瓦解する寸前で、逃走を図る者が多数。

四散する賊を見つめながら、ここから先は俺の仕事ではないと判断し、俺は本隊に戻りながら残っている雑魚の掃討を始めた。

血を洗い流す時間が惜しかったのでそのまま本陣に戻ると、そこに春蘭と季衣の姿が無かった。

「戻ったぞー」

とりあえず帰還したことを知らせながら天幕に入る。すると、入った途端に賢姉の鋭い視線に晒された。

何故に？

「……華景。何か言う事は？」

いや、いきなりそう言われてもアタシには心当たりがないのです
が。

突撃するときにちゃんと許可は取ったぞ。

「何の話が分かんのですが」

「私は、前に出すぎてはダメと言ったわよね？」

……ん？ はて？ そんな事を言われただろうか。
覚えが……あるような、ないような。

「言 っ た わ よ ね？」

「はい言ってましたすいません」

怒る賢姉の迫力に覚えていないとは言えず、条件反射で思わず謝
っていた。

もしかしくなくても、これは懲罰モノか。
命令無視したしなあ。

「で、どうして欲しいかしら？」

懲罰の内容を決めさせてくれるなんて、賢姉は優しいな！

「秋蘭の的になるか、一ヶ月甘いもの禁止か、全裸で城下町一週か、
選ばせてあげる」

こんな懲罰を考えるなんて、賢姉は鬼だな！？

秋蘭の的になったら穴という穴に矢を突っ込まれる！

一ヶ月も甘味が食えなかったら俺は干からびる自信がある！
全裸でそんなことしたら羞恥心で死ねる！

選択肢はあるようでないぞ……。

「私としては三つ目を進めるわ」

「俺に死ねと！？」

「私的になっていただけのでしたら、多少の手加減はいたしま
すが」

「前にもそういつて全力だったよな？！ 分かったよ甘味禁止にす
るよ！」

ちくしょう……。俺の杏仁豆腐が……。

「さて、それはもういいとして。今は春蘭と季衣が追撃に出ていま
す。」

すぐには戻ってこないでしょう」

すぐに頭を切り替えて報告に入る秋蘭。

なるほど。それでいないわけか。

「桂花、今回の策、見事だったわ。お陰で兵の損失も最低限に抑え
られた」

「あ、ありがとうございます！」

顔を赤くしながら返事を返す猫……もとい桂花。
そうしてたら可愛いのになあ。

「問題があつたのは華景のみ。最高の戦果ね」

「申し訳ない」

「そう思うなら、もう少し自重なさい。猪ではないのだから」

「善処します」

出来るかは分からないが。

「それじゃ、春蘭たちが帰還し次第、撤収します。撤収準備を始めなさい」

「「御意」」

こうして、賊討伐は終了した。

目前に陳留の街が見える。

一月も離れていなかったはずだが、随分と懐かしい気がする。
そつえば余談だが、賢姉がついに州牧に着任することと相成っ

た。

前の州牧が賊に恐れをなしてどこぞへと逃げ去ったらしく、その後を賢姉が引き継いだのだ。

それはいいとして、街が見えた程度では感傷に浸るほどの事でもないのだが、今はそうしたい気分だ。
なぜなら。

「腹減ったな……」

「本当にね」

「うう……」

結論から言おう。

糧食が尽きた。

それはもう完璧に。米粒一つも残さず綺麗さっぱり。

極め付けは、尽きたのがまさに陳留の目と鼻の先だったのだ。
これには同情せざるを得ない。

「で、ですが、一つ言わせていただけるならば、これは季衣が……」

「にゃ？」

名前を呼ばれて首を傾げる季衣の頭をなでる。

うんうん、季衣は気にしなくていいぞ。

「育ち盛りだからな、季衣は。あれくらい仕方ないな」

そう。仕方ない。

育ち盛りだから十人前を平らげるのも仕方ないんだよね？

「戦場では不可抗力や予測し得ないことが起こるのが常よ。……分かってるわね？」

誰であろうと流石にこれは予測できないとは思うが、約束は反故に出来ない。

今回ばかりは、桂花の運が無かったと思うよりない。

「……承知しております。」

ですがせめて……最後は夏侯惇ではなく、曹操様の手で……！」

どこまでも賢姉がいいらしい。

いやまあ、別にいいんだけどね。

「とはいえ、今回の桂花の功績も事実。」

……いいわ。死刑は減刑して、お仕置きで許してあげる」

「そ、曹操様！　ありがとうございます！……！」

「それから、季衣共々、私の真名を呼ぶことを許します。」

これからもより一層、奮起して仕えなさい」

「は、はい！　ありがとうございます！」

これで正式に猫軍師が参入というわけだ。

それに季衣も参入して、武官も確保できた。
なかなかの成果だ。

そういえば、ついでに探していた太平要術の書は見つからなかったな。

別段、大きな問題ではないが、もう少し念入りに探させるか……。

四話（後書き）

今日は更新できないかとひやひやしましたが、何とかなりました！

ちなみに、明日は恐らく出来ません。

色々あるんです……。

金が飛ぶイベントが。

あの子まであと少し……。

休暇？ 二（前書き）

書き上げてから、あの子をスルーしていることに気づいた。

うわあああああ！！！

休暇？ 二

賊討伐から二週間。

賢姉が州牧になって一週間。

俺の甘いもの禁止令が後十日。

正直、辛すぎて仕事に身が入らない。菓子が無いだけでまさかここまで辛いとは思わなかった。

仕事の後の一口って最高なんだぜ？ 休日の朝から食べ歩くのは格別なんだぜ？

あれがないと俺の人生の半分を失ったようなもんだわ。

だが仕事は手が抜けるほど余裕があるわけではなく、全力で当たっている。

そして終わったら魂が抜けている。

そんな事がありつつも、賢姉が州牧になってからようやく仕事が一段落したらしく、皆で城下町に視察に行くことになったらしい。

『らしい』というのが、俺はそれを直接は聞いてないからだ。

その場にはいたんだが、禁断症状が出てて聞いてなかった。

後で賢姉に散々絞られたなあ。

それはさておき、俺は今、視察に行くぜと召集をかけられて城門の前で待機している。

既に春蘭も来ているのだが、まだ秋蘭と肝心の賢姉が来ていない。

「春蘭。賢姉と秋蘭はどうしたんだ？」

「それが、華琳様の髪の毛のまとまりが悪いらしく……まだお部屋のほうに。秋蘭はその手伝いに行っております」

はあ、まあ……流石にそれは、どうしようもないか。
今日は少しジメジメしてるから、そのせいかな。

ちなみに、季衣は熱を出して寝込んでいたりする。
今朝見舞いに行ったときに聞いた話だと、あまりにも楽しみにしすぎて体調を崩したようだ。

お前は子どもか！ いや子どもだけでも。

ちなみに猫……桂花は城に留守番だ。

流石に主要の面子が全て出払うのは問題だからな。
留守番するのは俺でも良かったんだが、猫よりも俺の方が比較的街に詳しいことから猫が留守番になった。

伊達に甘味処を探して街中を練り歩いてはいないわけよ。

「まるで仕事をさぼってまで街に行っているかのようですね」

「いやいや、猫殿ほどではありんせん」

……ん？ 今俺、心の中で誰かと話したか？

「華景様。その猫とは、誰の事ですか？」

「……おお、いたのかミケ」

「誰がミケですか！」

全然気づかなかったが、俺の脇にいつの間にやら桂花が青筋立てて立っていた。

その様はまさしく威嚇する猫の如し。…これ前も言ったっけか？

「そうカリカリするなよ。毛並みが悪くなるぞ、トラ」

「私の名前は桂花です！ ミケでもトラでも猫でもありません！」

「分かった分かった。俺が悪かった、ケイちゃん」

「ですから！ あゝもう！」

桂花が怒鳴るたびに別の愛称を考えてはそれで呼んでみるが、どれもお気に召さないらしい。

まったく、贅沢なことだ。

「ほら、こうした愛称の方が親しみやすいだろ？ ケイちゃんだったら俺とお揃いだ」

「親しみにくくて結構です！ それに華景様とお揃いでも嬉しくありません！」

「賢姉だったらリンちゃんだから、ケイちゃんはお揃いには出来ないぞ？」

調子に乗って桂花をからかっていると、突然後頭部に痛烈な痛みが走った。

何か鋭いもので突かれたような、一点に集中した痛みだ。

それに耐えかねて思わずうずくまると、さらに背中を蹴られた。

「どわっ！」

奇襲に次ぐ奇襲に、俺は耐えかねて前のめりにこける。

「痛う」

「誰がリンちゃんよ、誰が」

頭を押さえて唸ると、頭上からさつきまで居なかった賢姉の声が聞こえた。

声色からして、若干お怒りのご様子。

とりあえず立ち上がり、賢姉と目を合わせないように向かい合う。

「畏怖されるより親しまれるほうが何かと都合がいいだろ？」

「そうね。だったら今日から華景の事は『犬』と呼ぶことにするわ。そのほうが親しみやすいものね？」

「そうなると『賢姉』が『犬姉』になるな」

挨拶代わりに冗談を交わして、皆が笑う。

そういうえば、こうして賢姉と冗談を言い合うのは随分と久しぶりな気がする。

ここ数ヶ月は忙しかったからか、気を張り詰めていてこんな冗談を言う余裕もなかったということか。

「待たせたわね。では、行きましようか。
留守は任せたわよ、桂花」

「……はい。お任せ下さい」

やはり不服そうではあるが、猫には今回は我慢してもらおう。
季衣と一緒に何か土産でも買ってくるか。

「じゃあ、行くか」

城下町に着くと、そこはいつもと変わらぬ民の活気に溢れていた。
市が開かれているのか大通りに人が多かったり、商店や飯店も客
の出入りが盛んで随分と賑わっている。

「今日はまた随分な賑わいだな。祭りでもしてるみたいだ」

「良いことではないですか」

「まあ、そうだな。……なんだありゃあ」

秋蘭に返事を返して周りを見ると、大通りの一角で、歌って
踊る三人組の少女の姿があった。

「旅芸人ね。この辺りでは珍しい」

「あまり、聞き慣れない歌ですね」

「遠方から流れてきたのでしょうか。それだけ治安が良くなってきたということよ」

賊の数が減り、安全に旅が出来る様になった証拠がああ旅芸人というわけだ。

これなら行商もまだまだ集まってくるだろうし、それに伴って俺達の国庫も潤うな。

それはいいとして。

「あの子達、ちと物足りない気がするな」

ちゃんと声量訓練はやっているのか？ とか、ちゃんと体は鍛えてるのか？ とか。

この人波の中ではもっと声を出さないと聞こえないか？

「確かに腕は二流ね。まだ駆け出しなんでしょう」

ふむ。まあ、頑張れ三姉妹。

これからきつと良い事もあるさね。

街の中央広場に着いた。

特に何も説明できる物はない。ただの広場だ。

「さて、あまり時間も無いしここからは手分けして見て回りましよう。

北側はもう見たから、春蘭は西側。秋蘭は東側。私は南側になるわね」

「そして俺は北側だな」

「……貴方はそんなにお仕置きして欲しいのかしらね？」

「冗談ですよはっはっは」

「まったく……華景は私と同じ南側よ。逃げないようにしっかり見守ってあげるから感謝なさい」

わーい嬉しいなー（棒）

「くっ！ 華景様がうらやましいです！」

春蘭や、代わってくれても、いいんじゃないよ？

ソレは無理だと分かっているが。

「さっきも言っただけで、時間はあまり無いのだから少し急ぎましよう。」

二刻後、またここに集合よ」

「「御意」」

解散して南側に向かって歩く俺達。

南側は鍛冶屋が多かったはず。日がな一日中、金属を打つ音が響いている。

それを聞いているとだんだんと眠くなる。

「華景は、この辺りには来るの？」

「たまにだが。鎌の手入れやら鎧の修繕やらする時に来るぐらいだ。賢姉もだろ？」

「私はそもそもあまり出かける時間がないのよ」

そりゃごもつとも。

休憩時間すら書簡から目を離そうとしないのはどうよ。

「いらっしゃーい！ 竹籠どうですかー！」

道の脇で威勢よく竹籠を売る声が聞こえる。
そちらに目を向け……。

「……奇抜な格好してんな。今時の若いのは」

あれはもはや下着じゃないのか？
腰に着けてるのは……工具入れ？

「貴方も十分に若いでしょう」

思わず釘付けになってしまった俺に気づいた少女が笑顔で手招きしてくる。

「……あれ、呼んでるよな」

「呼ばれてるわよ。行ってあげなさい」

いや、流石にあれに近づくのは勇氣がいるぞ。
変人に見えろとかじゃなく、周りからの目が痛くて。

恐る恐る近づいていくと、少女は満面の笑みで迎えてくれた。

「お兄さんええとこに来はったわあ！ どないです？ 竹籠お一つ」

間に合ってます。

本当にいいです。他を当たって下さい。

などと、笑顔の少女相手に言えるほどの根性がない俺は何かないかと視線を巡らせる。

何か……何かないのか！？

そこでふと、少女の脇においてあるよく分からない絡繰が目に残った。

「なあ、これは？」

「うん？ ああ、これですか。これは全自動竹籠編み機ですわ。
これ作るの苦労しましたん！ まずは型作りから初めて」

絡繰の事について熱く語りだす少女。

材料集めに苦労したただの加工するのにどうの組み立てがどうの、
等々。

どうやら俺は、厄介な話題を振ってしまったようだ。
少女は先ほどの笑顔よりもさらに輝いて語っている。

途中からはもう俺にではなく空に向かって語っていたから、忘れられてるんだろうなあ、と思いながら話が終わるのを馬鹿正直に待った。

何故その時に帰らなかったのか……。

「というわけなんですわ！ あ、興味があるんやったらやってみます？」

「……あ？ あ、ああ。そうしたいのは山々だが……」

いきなり話を振られ、思い出して後ろに振り向くと、賢姉はふう、とため息について俺のほうに歩いてきた。

賢姉なら、賢姉なら俺をここから救ってくれるかも……！！

「面白そうだし、試してみなさい」

この鬼！ 火に油を注ぎやがった！

「さあさあどうぞ！ ここに竹を通して……ここを回してください！」

「あ、はい。ここですか……」

賢姉が進めて勢いがついてしまった少女に負けて、絡繰についている取っ手を回してみる。

それなりに力を込めないと回せない様だが、回すたびに少しずつ

竹が編まれていく。

なるほど。

これは確かに便利かも知れない。竹を短時間で編めれば、生産量も劇的に増加するだろう。

だがまあ……。

「側面が編めるのは分かったが、底はどうするんだこれ」

「あいたあ！ お兄さん痛いところってきますねえ……。まあ、そこはノリで」

ノリかよ。

もう少し改良しないと使い物にはならないか。

そのまま何気なくグルグルと取っ手を回していると、絡繰の様子が変わってきた。

こう、黒い煙がモクモクと。

それから絡繰自体が小刻みに震えている。

「あつ！ お兄さんもう回したらあきませんで！ そない回したら……」

少女が言い終わるかどうかという所で、絡繰がよりいっそう激しく震えだし……。

ドンッ！……！！

と俺の目の前で爆発した。

擬音を使わないと表現できない爆発だったよ。

「あちゃゝ。やっぱダメやったかあ」

……やっぱ？ やっぱって何だ。

「これ実は竹の強度にまだ耐えられんです。せやからたまあにこ
うして爆発してまうねん」

俺は無言で、手に残った取っ手を捨てながら立ち上がる。

「じゃあこの竹籠は？」

「あ、これは手作りです。この絡繰で作ったのは一個もありません」

賢姉と話す少女の背後に立ち、静かに左手を上げる。

この嬢ちゃんは……！

「んなもんを、試させるな！」

そして少女の頭に思いつき叩きつける。

ゴッ！と音がして、少女が頭を押さえてうずくまった。

「いつつ……！ 乙女に何すんねんないきなり！」

しかし少女はすぐに復活して俺に抗議してくる。
文句を言いたいのは俺の方だ！

「爆発するようなもんを店先に置くんじゃない！　ってか客に試さすな！」

「……あゝ、いやまあ、目立つかなあって思つて…あはは」

「悪い意味で目立つたがな！　詫びて竹籠売りやがれ！」

「へ？」

「竹籠を一つ！　いくらだチクシヨウめ！」

「あ、ああ、毎度！」

「……どんな怒り方よ」

その後は特に目立ったこともなく、約束の時刻に集合場所に行く
と何故か春蘭と秋蘭も竹籠を片手にしていた。

余談だが、猫の土産にと櫛を渡すと、予想外に罵倒された。
季衣は肉まんを十個くらい持っていたら喜んでいた。

休暇？ 二（後書き）

最後のほうの地の文が雑になってしまった。
申し訳ない……急いだもので……。

あと四話くらい。

五話（前書き）

これかいてて思ったんですが、あの子次の話で出て来るのでは？

いよっしやあああああ！！！！！！！！！

五話

筆頭武官の朝は早い。

それはもう激しく早い。

具体的に言うなら、まだ外が暗いうちに目を覚まし、顔を洗って中庭で鍛錬してそのまま調練に向かうくらい早い。

さらに言うなら賊の報があつたらいつ何時なんどきであろうと飛び起きて出陣する。

何故そんな激務になっているか。

それは、ここ最近になって今までにないほど賊の動きが活発化しているからだ。

賊は規模も活動範囲も拡大していて、領地のあちこちで暴走している。

そして馬鹿馬鹿しい話だが、それだけ急いで駆けつけてそこにいるのは賊とは言えないただの暴徒。

ついさっきまでただの農民でした、と言わんばかりの者共ばかり。おかげで皆殺しは楽だが……。

数だけは一人数前に揃っているらしく、いくら殺しても害虫の如く湧いてくるから堪ったものではない。

ここまで実戦が嬉しくないのは初めてだ。

今日の朝議の席でも、やはり問題になったのはその賊の事。

季衣と共に鎮圧から帰ったばかりの俺も休む暇なく朝議に参加していた。

「華景、季衣、今回の賊はどうだったの？」

「それが、また黄色い布を巻いた賊でした…」

「ふざけた事にな。俺達が到着したら蜘蛛の子を散らすが如く、つてとこだ。」

「お陰で無駄な体力を使う羽目になった」

「到着したと勝手に追撃戦になったものだから、無駄に走ることになつて疲れた。」

「賊なら賊らしく素直に殺されるよ。」

「そう。またなのね」

「最近では、他の領地でも同じように黄色い布を巻いた賊徒が出没しているようです。」

「おそらく、大陸全土で一斉に蜂起しているものかと」

「猫の情報網に引かかるほどに、今回の賊は厄介だという事が。確かに、今までとは規模も活動範囲も拡大している。」

「そういえば、この間連れ帰った奴はどうした？」

「まだ何の報告も受けていないが」

「前に鎮圧に赴いた際に、殺し損ねた奴をそのまま連れ帰った。そいつの尋問は俺はしていないから、どうなったのか知らないのだ。」

「あの者からは、ほとんど有益な情報は聞き出せませんでした。唯一、首魁の名は張角という者だという事だけです」

俺の質問に秋蘭が答える。

張角……張角ね。聞いた事も無い名だ。

まったく知られないように情報操作をしているのか、本当に知らないのか。

どちらにせよ面倒なことだ。

「となると、地道に情報収集するより他にないか。次の鎮圧のときにでも何人が連れ帰るとしよう」

まあ、次の鎮圧は俺じゃないがな。
流石に体にガタがきてる。

それは春蘭や秋蘭も同じだろうが、次は二人に任せて俺は早く寝たい。

こんなところで過労で倒れたら目も当てられないし。

「そうしてちょうだい。さて、そうなると……」

「会議中失礼いたします！」

会議の席に、一人の兵士が転がるように駆け込んでくる。

相当慌てているようだが、また何か厄介なことか？

「何事だ……！」

春蘭が兵士に怒鳴る。

兵士は急いで礼を取ると、早口で報告を始めた。

「ほ、報告します！ 西方の村に、黄色い布を着けた賊が現れたと

のことです!」

おいおい早速かよ……。

休む間もないな、本当に。

「さっそく情報源が出てきたわね。

今回は誰が行ってくれるのかしら?」

「はい! ボクが行きます!」

賢姉の言葉に、俺の隣にいる季衣がすぐさま手を上げた。

いや、お前さっき帰ってきたばかりだからな? 普通休むところだぞ?

「季衣、貴方は今回は休んでいなさい。最近ろくに休んでないでしよう?」

「だ、大丈夫ですよ! ボク、村のみんなみたいに困ってる人を助けたいんです!」

いやいや、誰も季衣が元氣かどうかなんて聞いてないんだよ。

「そうね……。確かに季衣のその思いは尊いものだけど、そうして無茶をして体を壊しては元も子もないでしょう?」

「む、無茶なんか……してません……」

賢姉に促されても季衣はまだ食い下がる。
なかなか面倒な……。

「……季衣、聞きなさい。

今ここで貴方が無茶をして、目の前の百人が救えたとしましよう。でもその無茶のせいでこれから救えた数万の民が救えなくなるかもしれないの。

「……分かるわね？」

一人が無茶をすれば、他の奴も引つ張られる。そうして伝播するとめられなくなるからな。

「……だったら……だったら、その百人は見殺しにするんですか!？」

「するわけがないでしょう!!!」

「……あーあー、賢姉が怒ったよ。

今まさに賊が来てるってのに。

「馬鹿にするな! 私は目の前の百の民も、この先の数万の民も救ってみせる!

……そのためには、季衣に今倒れられては困るの」

賢姉にそこまで言われても、どうしても季衣は納得がいかないらしい。

目に涙をいっぱい溜めて、飛び出していつてしまう。

賢姉はそれをため息混じりに見送った。

「……では、今回の鎮圧には春蘭に行ってもらおうわ。疲れているでしょうけどお願いね」

「御意! お任せ下さい!」

元気な春蘭の返事を最後に、朝議は終了したが、出て行こうとしたら賢姉に止められました。

「華景。少しいいかしら？」

「睡眠時間を余分に確保してくれるんなら」

「季衣の事なのだけれど……」

俺の要求は無視ですか、そうですか。
無理なのは分かっているけどさあ……。

って、それより季衣か。

「ああ、あれか。若気の至りだろ？」

まだ子どもの季衣は自分が動いていないと落ち着いていられない
んだろう。

賊から民を守るといふ使命感にとらわれている。

「それとなく様子を見てきてあげてほしいの。頼める？」

「……俺が行ったら余計にへこみそうだが」

いかんせん俺は口が悪いから、季衣には辛いことを言いそうだし。
というか、ぶっちゃけ寝たい。

「そこはなんとかなさい。頼んだわよ」

なんと強引な！ 横暴だ！

と抗議する間もなく、賢姉は去っていった。

……あー、季衣は何処にいるのやら。

季衣を探して約一刻。

貴重な睡眠時間を削って城内を探し回り、ようやく城壁の上に居るのを見つけた。

そこまで上って近づいていくと、どうやら昼間の活気に溢れる城下町を見下ろして何やら考え込んでいる様子。

見つけたら即刻鉄拳を下して寝てやろうと思って息巻いていたが、季衣の様子を見てそんな事をすべきではないと分かった。

どうやら、思った以上に重症なようだ。

「……何してんだ」

季衣の真後ろまで近づいて声を掛けると、季衣は驚いて振り返り、俺の顔を見た。

「兄ちゃん……」

「何を悩んでるのか知らないが、考えるだけ無駄だと思うがな」

季衣の隣に腰を下ろし、同じように街を見下ろす。

俺達が守ってきた、守っていく民達の日常が広がっている。

ほんの一部の風景ではあるが、活気に溢れているのを見ると苦勞した甲斐があったと思える。

「……兄ちゃん。ボク、本当に無茶なんかしてないよ」

まだ言うかこの嬢ちゃんは。

「そうかい。だがな、季衣の隊の連中は随分と疲弊してるぞ。

いや、あいつらだけじゃない。賢姉のとも、俺の隊も、春蘭も、秋蘭もだ。

こんな状況じゃなかったらとつと休暇を取って休ませたいくらいにな」

馬鹿みたいに次々に賊が現れてくれるもんだから、休みたくても休めない。

「それでもなんとか順番に休めるように仕事を回してんだ。

他の奴を信用して、そいつならやってくれると思って、ぶっ倒れないようにとつと休む。

季衣。お前はどうか？ お前は春蘭や秋蘭を信用出来ないのか？」

「そ、そんなことないよ！」

「ふむ。なら、信じて待っていてやれ。

今の俺達の仕事は、黙って速やかに寝ることだ」

最後に季衣の頭を少し乱暴に撫で回し、俺は笑った。

季衣もそれを見ると、釣られて笑顔になる。

やはり季衣は先ほどの陰鬱な顔ではなく、こうして笑っているほうがずっといい。

この方がからかい甲斐があるしな。

「……うん。そうだよね。」

ボクだけじゃ……ないんだよね」

「おう。分かったら寝るぞ！」

よっしゃああああ！！

これで寝れるううう！！！！

内心で歓喜しながら立ち上がり、城内に戻ろうとすると、季衣の歌声が聞こえて俺は足を止めた。

いつぞやにどこかで聞いた事のある、しかし思い出せない歌。明るい曲調のそれを、季衣は楽しそうに歌い上げる。

「~~~~~」

練習したのか、止まることなく歌っている。

……どこで聞いたかな、これ。

「~~~~~ ……」

「なあ季衣。それ、何処で聞いた？」

歌い終わるのを待って、俺の胸の中のもやもやを消すべく季衣に聞いてみた。

「え？ えつと…旅芸人のお姉さんが歌ってたんだ。確か名前は張角……あつ！」

ほう。張角とな？

聞いた事があるなあ。ついさっき、朝議の場で。

「さあ、季衣。寝ようか」

「華景兄ちゃん！ 華琳様に報告しないと！」

嫌だ！ これ以上睡眠時間を削られて堪るか！ 俺は寝る！

季衣の怪力に引き摺られながら、結局俺は賢姉のところに報告に行くのだった。

五話（後書き）

ところで、種馬こと一刀クンは何処所属にしましょう？
もちろん魏は無理です。断固拒否します。
だって、彼が居たらあの子が！

六話（前書き）

予想外に短くなった……。

これ、前の話に繋いだほうが良かったかな……？

六話

あの後、賢姉に報告に行ってから春蘭が鎮圧から戻るのを待ち、軍議が開かれる事となった。

そりゃあ首魁の正体が分かったら軍議にもなる。

帰ってきたばかりで休む間もなく軍議にでている春蘭には、何故か疲れが見えなかった。

むしろやる気がみなぎっているように見える。対して俺は溜まっていた書類仕事を片付けてぐったりしている。

報告書やら賢姉の手伝いやら、やれることをやっていたただけだが。

そのせいで常備している菓子も無いからさらに疲労感倍増。
もう最高に最低な気分だぜ……。

それはさておき、季衣の報告から分かった事は二つ。

一つは、張角というのは女の旅芸人だということ。

もう一つは、張角には二人の姉、ないし妹がいるという事。

この陳留に来たことがあることから、季衣の他にも見たものはいるはずだ。

そいつらを見つける事が出来れば、色々と使い道があるかもしれない。

「首魁の正体が分かったのは確かな前進だけれど、出来ることならその目的も知りたいわね……」

目的、ね。ただの下劣な輩なら天下をとるとか、そういったこと

を言ってくれりや楽でいいんだが。

実際は何も分からない。目的が分からなければ、敵がどう動くかも予想しづらいから困り者だ。

「目的……ですか。……見当もつきませんね」

「だな。だがよ、首魁が歌手なのはさておき、あいつら新しい宗教でも始めたんじゃないか？

こんだけ暴走してんだ。全体を制御できるとは思えないが」

大方、信者が教えを歪んだ解釈でもしてるんじゃないかと思う。それなら首魁が誰だろうと関係ない。都合のいいことを言う奴を祭り上げれば良いだけなんだから。

そしてそれは、誰にも止められる事無く暴走していくことになる。

「もしそうなら尚更タチが悪いわ。いつそ大陸制覇でも謳ってくれば遠慮なく叩き潰せるのだけれど。

昨日、都から正式に『黄巾の賊徒を早急に平定せよ』と軍令が届いたのだし」

「……相変わらずクソみたいな対応の遅さだな。流石は華の都だ」

賢姉からそれを聞くなり、俺は朝廷のあまりの対応の遅さに思わず舌打ちとともに悪態をついていた。

どうせあの種無しの爺共が渋ってたんだろう。

名ばかりの大將軍殿も当てにならないし、朝廷を早急に潰すべきじゃないのか。

「ほ、報告します！」

軍議の最中、先日と同じく一人の兵士が駆け込んでくる。そして、やはり先日と同じく大慌てで礼をとった。

ああもう！ またか！

「今度は何だ！？」

「そ、それが……また黄色い布の賊が現れました。それも、今までよりも大規模です！」

言った傍からわらわらと……！
お呼びじゃねえぞクソが！！

「さっき帰還したばかりだぞ！ どうなってやがる！？」

「落ち着きなさい、華景」

「だが！ ……いや…そう、だな」

そうだ……ここで怒鳴っても事態は好転するわけもない。どうも冷静さを欠きやすくなってるな。

一度深呼吸をして、気持ちを静める。

激情に駆られた心を落ち着け、事を冷静に考えるように。

そうして俺が落ち着くの見計らって、賢姉は話を進めた。

「秋蘭、兵の準備はどの程度で済む？」

「申し訳ありません。物資搬入が明日の明朝でしたので、すでに兵達は休ませています」

「……そう。間が悪かったわね。おそらくは、いくつかの暴徒が寄り集まったのでしよう。」

これまでのようにはいかないわ」

命令系統が出来たか。吠えたら散る雑魚から嬉しくない格上げだ。それなりの指揮官を得たんだろうなあ。厄介極まりない。

さて、時間もないし、どうしたものか。

「華琳様！　ボクが行きます！」

そしてこんな時にまた季衣が声を上げる。

先日以上にやる気に満ちているらしい。

しかし今回は、前のような焦りは季衣から見えなかった。

「おい季衣、お前は休めつつただらうが」

「大丈夫だよ！　もう十分休んだし、それにもう無茶はしないから」
今度は無謀な事をしないだろうな？

少し学んで賢くなったとはいえ、それが心配だ。

無茶しなくなる代わりに、一度の戦闘に全力を注ぎすぎて無謀なことをする。

若気の至りではあるが、それが命を奪いかねない。

が、付いて行く奴がそれを止めればいいだけの話でもある、か。

「……だそうだ。今回は季衣に行かせたらどうだ？」

「先日は何も言わなかった華景がそう言うなら、季衣に任せましようか。」

「ちゃんと責任持って面倒見なさいよ？」

賢姉は俺の言葉に頷き、同時に俺に行けと言って来た。

まあ、たきつけたのは俺だし行くけども。

「分かってる。せいぜい頑張りますって」

「あ、ありがとうございます！」

「しつかりやりなさい。」

桂花、すぐに動かせる部隊はある？」

「はっ。当直の隊ならば、少数ではありますが」

「すぐに出陣準備に取り掛かって。事は急を要するわ」

「御意」

「ではこれにて軍議を終わります。」

二人とも、頼んだわよ」

「「御意！」」

まあ、今回に限っては引きこもってればいいだけなんだし、楽だよな？

六話（後書き）

一刀クンのルートの関するたくさんのご意見ありがとうございます！
彼が出るのは当分先ですので、まだご意見ありましたらどうぞ！

明日、ついにあの子が登場！

とか前にも言ったなあ。

今度こそ、今度こそ出ます！出します！

うおおおおおおおおお！！！！！！！

待ってるよおおおおお！！！

七話（前書き）

ついにキタアアアアアアア！！！！！！！！！！

七話

先遣隊として季衣と共に出陣した俺達は、その日の夕刻に報告にあつた街に到着した。

街にはどうやら運よく義勇軍がいたらしく、四方を即席の柵で囲うなどして防衛戦に備えていた。

それはいい。

対策をしっかりとすれば、本隊が来るまで耐えられるようになる。こちらは寡兵とはいえ、防ぐだけなら幾らでも手はあるものだ。こちらが準備不足のように、敵も数だけの烏合の衆なのだから。

問題なのは……

「あー！ あん時のお兄さんやないか！」

「あー、竹籠の売り子をやっていた嬢ちゃんじゃないかー」

「なんやえらい棒読みやな……」

いや、確かにこの子がいたのにも驚いたよ？

まさかあの時の（いろんな意味で）爆発娘がこんなところで義勇軍の指揮官やつてるのはびっくりしたよ？

だが、このときの俺は、別の事に気をとられていたんだ。

爆発娘の隣に並んでいるもう二人の指揮官。

その片割れの、全身に古傷がある銀髪の凛々しい少女。

少し癖毛なのか犬耳のように両側が跳ねていて、後ろは三つ編みにしている、手甲をはめた少女に、俺は目を奪われていた。

「ん？ お兄さん、どないしたん？」

「さっきから風ちゃんの方を見てぼうつとしてるのー」

「いや、私ではないだろう」

三人が何やらわいわいと言っているが、そんなことはどうでもいい。

俺は銀髪の少女に歩み寄ると、その目をじっと見つめた。

「あ……あの……何か？」

「結婚しよう」

「は？」

「へ？」

「ええ？」

「にゃ？」

啞然とする三人娘と季衣の反応を無視して、俺は素早く少女の手をとる。

「式はいつにしようか？　子どもは何人欲しい？　どんな家を建てようか？」

広いほうがいいか？　いやいや多少狭いほうが暮らしやすいか？
庭はあったほうがいいかな？

あ、そうだ！　何か動物を飼おう！　犬と猫、どちらがいい？　俺としては猫をお勧めしたい！

あ、子どもの名前はどんな名がいい？　男の子でも女の子でもいいが、きっと凛々しい名が似合うはずだ！

どうせなら子どもは二人は欲しいな！　男の子と女の子と一人ずつなんてどうだ？　きつと可愛らしくて聡明な子に育つだろうな。

そうだ、式には誰を呼ぼうか？　賢姉と夏侯姉妹と季衣と君の友人の二人は決定として　」

「ちょ、ちよつと待って下さい！」

「ん？　どうかしたか？」

将来について熱弁する俺を銀髪に少女に止められる。
顔を赤くしながら慌てているのも可愛いなあ。

「あの、その、いきなりそう言われましても……まだ、お互いの事をよく知りませんし……」

「おっと、それは失礼した。まずは健全なお付き合いからというわけだな？」

ではまず自己紹介から。俺は曹丕。字を子桓という。州牧である曹操様の下で武官をしている者だ。

趣味は鍛錬と甘味処巡り。特技は菓子作り。好きなものは甘いものと辛いもの。嫌いなものは苦いものだ。

普段は兵達の調練などをしているが、休日には　」

「ちょい待てい!!」

自己紹介の最中に、俺と少女の間に爆発娘（仮）が割り込んだ。
た。

そのせいで少女の手を離してしまう。

「……なんだ爆発娘（仮）。俺は今猛烈に忙しい。
お前の用事は後にしろ」

「お兄さんの自己紹介は長いねん！
今はお兄さんが尻を口説き落とすのを待ってられるほど時間無い
ねんで！」

「そうなのー！ それに、まだ沙和たちは自己紹介してないのー！」
「……そういえばそうだったな。
お前達の名はなんと言う？」

割り込んできた二人の向こう側にいる少女に問いかける。
ぼうつとしていた少女は、急に聞かれたことに慌てて名を名乗っ
た。

「あ、はっ！ 姓を楽、名を進、字を文謙と申します」

「うちは李典。字は曼成いいます。よろしゅう」

「沙和は于禁なのー。字は文則なのー」

ふむ。楽進と李典と于禁か。

とりあえずは覚えた。

「季衣、挨拶を」

「うん！　ボクは許緒だよ！　よろしくね」

俺の後ろに立っている季衣にも挨拶をさせて、全員の自己紹介は終わった。

さて、遊ぶのも大概にして、そろそろ配置決めでもするか。

「とりあえず、仮設置した本陣に行くぞ。
すべきことは山とある」

楽進 side

先ほどから、曹丕様には驚かされてばかりだ。

会っていきなり……こ、婚約を申し込まれたのもそうだが、名を聞いてあの曹操様の弟君として名高い曹丕様だと聞かされたのにも驚いた。

噂を聞く限りでは、武に秀で、大鎌を手に戦場を駆ける様は死神のようだと言う。

初めは無骨な大男だと思っていたが、それがこんな容姿端正な方とは思わなかった。

仮の本陣に入ると、曹丕様は早速現状の確認を始めた。

「義勇軍の兵力は？」

「五百です」

「俺達の隊もだいたい五百前後。対して敵は三倍強。

……村の立地からすると、東西と南に兵を置くべきか。

弓兵と歩兵を均等に分けて置くとして、誰を何処に置くかだが…

…」

先ほどとは打って変わって真剣な表情を浮かべる曹丕様。

……さっきのあれは冗談だったのだろうか、と思えてしまう。

「…樂進、于禁」

「はっ！」

「はいなのー」

「お前達は南側の指揮を執れ。李典、季衣は西側。俺は東の指揮を執る」

「了解や！」

「うん！ 任せて！」

「いいか。誰一人として通すな。明日の明け方まで、何としても耐え切れ。

俺達の後ろには力なき者たちがいる。何があろうと、負けることは許さん」

鋭い眼光を宿した曹丕様が、全員の顔を睨むように見回す。
その目に体を貫かれたような錯覚を覚え、私達は思わず姿勢を正した。

霸王の弟君とは、これほどのものなのか。

「分かったら、往け」

「「御意！」」

迷う事無く臣下の礼をとった私達は指示された持ち場へと駆けていった。

華景 side

解散して持ち場に着くと、すでに目前には黄巾を巻いた賊が群れを成して迫っていた。

東側の敵は、ざっと見て千。対してこちらは五百にも満たない。
だが、一人につき三人も殺せば済む話だ。

「配置に着け！ 接敵するまえに矢で勢いを削ぎ落とすぞ！」

弓兵に指示を出し、即座に構えさせる。
後、少し……。

「……掃射！」

合図と共に数十の矢が賊共に飛来する。それらは賊の前曲に降り注ぎ、敵の命を奪っていく。

しかしまだ勢いは衰えない。仲間の屍を踏み越えて、奴らは前進してくる。

「第二射構え！……放て！！」

二度目の掃射を放ち、少しだけ賊の勢いが落ちる。
だが、もう距離が無い。接敵する。

「ちっ！ 予想以上に調子付いてやがる。
いいか！ 一匹たりとも通すな！ 死んでも守り通せ！」

「「応っ！！」」

こちらの部隊の士気は高く、威勢のいい返事を聞くと、前線が接敵した。

それから数刻。

物量で押してくる賊を技量と士気の高さで抑え込んでいた東の隊だったが、流石に辛いものがあつた。

敵の数は半分ほどまで減りはしたが、こちらの負傷兵も段々と増えていく。

やはり、数の不利はなんともし難いな。

ここで俺が特攻してもいいが、そうすると指揮をとる者が居なくなるから動くに動けない。

と言いつつ、俺は前線で敵の首を刈り取る。

弓兵には部隊長の指示に従って敵陣の中央を狙い撃つように指示しておいた。

そして俺は、押されていた前線に出てきたのだ。

「邪魔だ」

悪態を吐きながら襲い掛かってきた数人の首を、大鎌を薙いで斬りおとす。

本隊が来るまで後どれくらいだ？

振り向きざまに背後にいた敵を肩から引き裂く。

今ので……ちょうど百人目か。

ふと周りを見れば、俺の周囲には死体の山が築かれていた。俺が通ってきた道にも、点々と道しるべのように屍が転がっている。

それを見て臆したのか、賊共は先ほどから俺に近づいてこようとしないう。

「……これで仕舞いか？」

この分なら、他の連中も大丈夫だろう。

結構意気込んでたんだが、張り切るだけ無駄だったか？

血塗れの大鎌を一振りして血を飛ばし、肩に担ぐ。

ああ、また服が血塗れだ。せつかくの外套も台無しだな……。

「伝令！」

息を切らして、本陣の方から兵士が走ってくる。

「言え」

「はっ！ 南方よりこちらに向かっている軍を発見いたしました！」

「旗は？」

「青地に曹、夏の文字です！」

おうおう、ようやくと到着か。

これでようやく反撃に移れるな。

「了解した。……総員に告ぐ！ これより我らは、反撃に移る！
全力で屠れ！ 残らず駆逐しろ！」

「「おおおおおおお！……！」」

騒ぎ出す血を抑えず、俺は兵達よりも早く賊の中に特攻していった。

「……っと、言うわけ、です、はい」

「へえ、そう。で？」

「……ほ、報告は、以上、です」

地面に正座した上に錘を置かれながら、俺は正面に座る賢姉にこの次第を報告していた。

その後、賢姉たちの本隊が到着したことで形勢は逆転し、賊共はあつさりと鎮圧された。

その後、俺と季衣は三人娘を連れて賢姉に報告。

結論からいえば、三人娘は賢姉の元に仕える事となった。

その際、俺が賢姉の目の前で楽進 凧の手を握って喜びを露わにしながら再び求婚し、現状に至る。

「凧としてはどうなの？ この愚弟の事は」

「わ、私は……」

今まさに渦中の人である（俺が引きずり込んだ）凧は、俺と賢姉を交互に見ながらおろおろと戸惑っている。

が、その表情をあまり見れない俺は、ひたすらこの拷問に耐えるしかない。

「貴方がいいのであれば、この愚弟はあげるわ。

こんな愚弟でなければ、だけど。

脳筋で馬鹿で特攻大好きで甘いものに目が無い愚弟でなければね」

……酷い言われようだ。

いや、確かに賢姉からすればそうかもしれないが。

「いえ、あの、華景様はとても立派なお方だと思います……」

おお、風！ お前は良い子だなあ！

「まだ分からないのでしょうか。答えを聞くのは、先でもよろしいのでしょうか？」

困惑する風を見かねて、秋蘭が助け舟を出した。

「ついに風にも春が来たんかあ！ めでたいなあ！」

「なのー！」

姦しい二人は放っておこう。
まるで話を聞いていない。

「……そうね。でも、必ず答えは聞かせてもらっわよ」

「はっ」

こうして、曹操軍に新たに三人の将が加わることとなった。

七話（後書き）

余談ですが、これがやりたくて仕方なかったのですが、書いた後に若干詰まりました。

ご意見お待ちしております。

休日（返上） 三（前書き）

よっしゃあああ！

ラスト一時間でなんとか完成したぞ！

休日（返上） 三

黄巾の賊を討伐し、虜たちが傘下に加わってから数日。その間に国の体制に若干の変更や改善などがあつた。

例えば、城下町の警備に対する改善案。

今までは人員が足りていないことが原因であまり治安維持などを気にかける余裕が無かつたために、少数の部隊を巡回させるなどしていたが事が起こってから対応が遅く、民から不満の声が上がっていた。

それを尻、真桜、沙和の三人と義勇軍が来たことで人員不足が解消され、しっかりとした警備体制を敷くことが出来る様になった。

新規に徴兵した若い兵、いわゆる新兵の奴らもそこに配属させ、三人に調練をさせることで正規軍の水準もある程度は上がるはずだ。

で、経験の浅いこの三人を將軍として鍛えるための人間が必要になった。

個人の武もそうだが、他の書類仕事やら調練のやり方やら、教える事は山とある。

そしてその教育係は、俺になった。

元は俺が賢姉に推して加わったわけだからしっかり面倒見ろ、というお達しもあつたりなかったり。

それに秋蘭は政務を手伝っているし、春蘭は人にモノを教えるのは不得手。

そうなれば当然、俺に回ってくるというのもあつた。

そうして体制を新たにしてからというものの、俺の仕事は増える一方。

いや、それはまあ、嬉しくはないが構わない。
今までの報告書や雑務に関しての事に加えて、警備隊の山が一つ増えただけだし。

俺が頭を痛めたのは三人の教育を始めてからの事。

休暇返上で三人にあれこれと教えていた今日、新たな警備隊の仕事も細々とした内容が決まったらしく、俺と三人娘は玉座に呼び出された。

と言つても、俺は警備隊の新制に携わっていた側から今更説明は出来ないはずだが。

「
という事になったから、後の細かい決まりはこの書簡を見なさい」

「……賢姉、端折り過ぎではないか？」

口頭で説明された内容を纏めると、警備隊の駐屯所を数箇所を増やして物見櫓を建てるよ。後は書簡見てね！

いや、もっと他に重要な事が無かったか？ それともあれか。実は書簡に重要な事がさらりと載ってるのか？

「分かってるわよ。でも私もまだやる事が多くてあまり時間を割けないの。」

そのために華景を呼んだのだから、しっかり仕事なさい」

「あー、そのための俺ですか。……了解」

賢姉に任された（丸投げされたとも言つ）仕事を拒否する気はなく、俺は二つ返事で承諾していた。

それを聞くと、賢姉は書簡を四つ俺に渡して早々に玉座を後にした。

後に残された俺達は、とりあえず渡された書簡を全員に回し、俺も念のためそれを開いて読んでみる。

「えらい量あるなあ……」

「読むの面倒なの……」

開いた書簡には、二人がうんざりするの分かるほどにびつちりと規定が書き込まれていた。巡回経路について、不審者発見時の対処法、巡回する際の注意事項等々。それらが小さな文字でこれでもかと敷き詰められている。

確かにこれはため息を吐きなくなるのも分かるが、文句を言う二人の隣で、凧だけは生真面目に書簡を隅々まで読んでいた。もしかして、この規定を全て暗記するつもりだろうか？……流石にそれは、無理だよな。

凧が読み終わるのを見計らつて、俺は先ほど大雑把に賢姉がしていた説明を引き継いで話を始めた。

「まあ、文句は後で執務室で言い合ってくれ。

でだ。この警備隊だが、お前らの主な仕事は新兵及び警備隊の訓練と城下町の治安維持。

本来はこれにもう少しあるが、それはお前らが慣れるまでは俺がしておく。

そして、お前らの当面の目標だが、最低でもこの街の道は一つ残

らず覚えろ。これは当然だな」

「ええ！？ そんなの無理なのー！」

「こない広い街の道全部なんて無理やつて！ お兄さん鬼か！」

「文句は後で賢姉に直談判してこい。または早々に諦めて覚えろ。さて、じゃあ早速街に行くとするか。今日だけが、俺が案内役だ。」

全員で揃って回るのも今日だけ、だな。付いて来い」

「はい！」

「お兄さんの鬼！ 人でなし！」

「鬼畜なのー！ 横暴なのー！」

俺は愉快的な事を口走る二人に鉄拳制裁を加えて黙らせ、二人の襟を掴んで歩き出した。

ちなみに、しっかりと返事を返してきた風には後でお菓子を渡した。断られた。

城下町に着いた俺達は、とりあえず三人に道案内をすべく街を練り歩くことにした。

もう昼を過ぎているとはいえ、まだまだ街は騒がしい。

「街はいつ来ても活気に溢れてんなあ」

「まあ、街の発展は賢姉や猫の賜物だな。それを守るのが、これからの前達の仕事だ」

「うう……そう言われると責任重大なのー」

「だが、遣り甲斐のある仕事だと思う」

「そうとも言える。お前達の仕事振り如何で、民から賢姉の評価が変わるんだからな。」

……だが、そう肩肘張らずにやる事をしてればいいだけだ」

談笑しながら、大通りやそこから伸びる裏通りを確認して歩く。

「この通りは飯店が主だ。ここをもう少し行った所にはなかなかいい甘味処があつてな。」

後……いや、それはいいか。この辺りはあまり裏通りは無いから、少し急ぐぞ」

「はい。分かりました」

素直に返事をしてついて来る風を見て、真桜たちがはあ、とため息を吐いた。

「風は固すぎるわ。もう少し楽にしたらええのに」

「初仕事で張り切ってるから仕方ないのー」

「真桜、沙和。真面目にしないか」

二人に注意しながら、凧の視線は常に周囲に向けられている。初日から随分と張り切っているのが、傍目からでもよく分かる。こつ、肩から鬨気でも発しているようだ。

凧に二人が注意されつつ、さらに街の説明をして歩いていると。

「あー！！！！」

「っ！？ 沙和！ 何かあったか！？」

いきなり叫び声を上げた沙和に驚きながらも、全員の視線が一斉にそちらに向けられる。

俺の後ろを付いて来ていたはずの沙和は、いつの間にやら一軒の書店の前に移動して異常に喜んでいた。

その手には、一冊の本がしっかりと握られている。

「阿蘇阿蘇の最新号なのー！ こんなところにあつたなんて信じられないのー！」

阿蘇阿蘇ってお前……いや、俺も甘味処の話したけども。だからってお前、今それを見つけたからって騒ぐか？

「沙和……」

凧の拳が若干震えている。

そういえば、凧は氣の使い手だったか。
手合わせをした時に氣弾を撃たれて焦ったのは、記憶に新しい。
その時は……反射で氣弾を蹴り上げたんだった。蹴り上げた足が
痺れて苦戦したなあ。

と、それはさておき。

俺はクルクルと回りながら喜ぶ沙和の手から、阿蘇阿蘇とやらを
素早く取り上げた。

「あー！ 返してなのー！」

「後で買え、後で。店主に取り置きでもしてもらえ」

「そんなー！ 最後の一冊なのー！」

「はいはい、後でなー」

一応これも仕事のうちだ。
俺だって真面目にしてるんだぜ？

沙和が届かないように掲げた阿蘇阿蘇を取り返そうと跳ねる沙和
を尻目に、店主に渡そうとしたところで……。

「あああああー！！！！」

「真桜！？ どうした！」

次は通りの反対の店で真桜が叫んだ。
阿蘇阿蘇を店主に押し付け、急いでそちらに駆けつける。

そして、そこには先ほどの沙和を再現したような状態の真桜が回っていた。

手にしているのは……な、何だあれ？

「限定版絡繰夏候惇やないか！ 製造停止されて凶らずも数量限定になっててものごつつ貴重なあの幻の！

それがこないな店に置いてるやなんて……これはまさしく運命や！」

おお、沙和以上に熱く語ってらっしゃる。
というか、あれまだ残ってたんだなあ。

どこぞの物好きが作ったのか知らないが、春蘭の許可も取らずに販売してたのを本人が見つけて、怒り狂って壊しまくったはずだが。春蘭に発見されずに生き残っていたか。頑張ったな。
それも今日で終わりだが。

風が怒り出す前にさっさと真桜に詰め寄って、先ほどと同じく取り上げて高々と掲げる。

「ああ！ お兄さん返したってえな！ それめちゃくちや貴重やねん！」

「後で春蘭に渡しとくから、春蘭から受け取ってくれ」

「それ確実に壊されとるやないか！ この鬼！ 鬼畜！」

「……お前、給料が愉快的事になりたいらしいな」

「ちょ！ それは卑怯やで！」

やんややんやと言ってくる真桜を脅しつつ、これもまた店主に預けようとした。

そう、
 した
 んだ。

店主にそれを渡す直前に、二人にため息を吐いていた風の動きが変わるのが見えた。

「おい！　そこのお前！」

風は鋭い声色で、隣の商店から出てきた男に怒鳴りつける。

すると男は、何を思ったのか全速力でその場から逃走しだした。

「待て！ 逃がすか！」

尻は中腰になり、両手を光らせながら氣を溜めていく。

あー、あれっでもしかなくても氣弾だよなあ。

あれ喰らったら無事じゃすまないだろうなあ。

主に街が。

「ちよつと待てええええ！」

「はあああああああ！！！！！！！！」

俺の制止する声も空しく、尻は渾身の氣弾を男めがけて放ってしまっただ。

氣彈はものの見事に、男もろともその先にあつた民家を巻き込んで

で飛んでいった。

風は氣彈が開けていった大穴に入っていくと、完全に氣を失っている男を引き摺りながら戻ってきた。

その顔は、一仕事終えた後の様な清々しさが感じられるような、そんな顔だった。

「不審者を一名、確保しました！」

いいことした！
みたいな顔で報告されてもなあ……。

「阿蘇阿蘇買えたの！」

「絡繰夏候惇、無事やつたわあ！」

後ろでは、己の欲に実に忠実な二人組みが安堵したような声で話している。

…これは…あれか。

俺に怒れと天命が下ったのだからな。

きっとそうだ。そうに違いない。

俺は胸いっぱいに空気を吸うと、一旦それを止め。

「お前らあああつあああああああ！……！！！！！！！！！」

久しぶりに、全力で怒鳴ったのだった。

その日のうちにこの騒動は賢姉たちの元に報告され、俺達四人はその付近の住人に謝罪と修繕の手伝いをした。

そして城に帰って賢姉と猫にしこたま絞られ、警備隊の初日は大騒動を引き起こして終わった。

休日（返上） 三（後書き）

遅くなりまして申し訳ないです。

予定外の事が立て続けに起こったもので、更新が遅れました。

さて、凧ちゃんどうしよう。

結構書くのが難しいキャラですね……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5172z/>

恋姫無双 曹丕伝

2011年12月30日23時49分発行